

第4章

分科会活動

開発：貧困撲滅への新たな アプローチ	70
メディア：グローバル社会の影響力	75
暴力と平和：武力行使に対する 価値観の再考	80
教育：次代を担う市民の育成	86
ナショナリズム：国への思いと 排外主義	93
アイデンティティーの社会学	99
文化：グローバリゼーションの渦中で	103

開発：貧困撲滅への新たなアプローチ

Innovative Approaches to International Development

分科会メンバー

廣瀬裕子*

伊関之雄

古屋佑樹

間橋大地

吉川真由

Alissa Marque*

Bryan Beaudoin

Gurpreet Kalra

Mary Lancaster

Jazmine Rodriguez

(*はコーディネーターを示す)



分科会概要

貧困撲滅。言葉にするのは簡単だが、達成は容易ではない。途上国において最も深刻な貧困問題は国際社会が共有する課題として、従来は、各国政府やNGO、国際機関が取り組むものと考えられてきた。しかし、近年ではフェアトレードのような個人の消費活動の見直しや環境問題に取り組む学生運動、人権の尊重や途上国との持続的な取引を理念として掲げるビジネスなど、個人にとってより身近なレベルでの革新的なアプローチがみられる。貧困撲滅の達成と持続可能な開発を目指すためにはこのようなより多くの働きかけが必要である。当分科会では、貧困撲滅に対し日米に何が出来るか、従来のアクターに加え、主体的に行動する一アクターとしての個人が果たせる役割を探究する。

活動内容

1. 事前活動

開発という広いテーマをどのように扱っていくか、そして貧困の現状を私達はどのように理解することが

出来るか。春合宿でこれらの難しさと重要性について話し合い、春合宿後は会議に向けて様々な講演会に参加し、勉強会を企画した。

プラネットファイナンスジャパンにより東京で開かれたマイクロファイナンスシンポジウムや、ヒューライツ大阪による「新たな国際開発の潮流と人権－地域や学校で支える子どもの人権：カンボジアでの人身売買との闘い」と題される研究会に参加した。

また、JICAアフリカ部調査役の山本愛一郎氏より「コミュニティー開発から考えるエンパワーメントと国際協力」というテーマのもとレクチャーをいただき、フェアトレード研究をされている京都大学農学部の辻村英之教授、カンボジア出身で、開発経済学を専攻されている東南アジア研究所職員のランヒセラ・ドロテア・アグネス氏、南アフリカ共和国出身、NGO活動をされているトーマス・C・カンサ氏、「ほっとけない世界のまずしさ」CSOネットワーク共同事業責任者の今田克司氏など、開発にかかわる様々な活動をされている方のお話を伺った。

これらと同時に、東京、京都を中心に何度か合宿

を開き、週末にはスカイプによりインターネットを通じて本会議に向けて話し合いを重ねた。

また、各自がトピックを決め、ペーパーの作成に取り組んだ。それぞれのトピックは以下である。

伊関之雄 “What is the ‘innovation’ from Fairtrade perspective”

古屋佑樹 “What are needed for people to make action?”

間橋大地 “Participatory Development and Good Governance”

吉川真由 “The Possibilities of Gene Modified Foods”

Bryan Beaudoin “Mapping Disease and Community : Lessons from Indonesia”

Gurpreet Kalra “Women’s Status in the Household : Reexamining Approaches to Gender and Development”

Jazmine Rodriguez “Working Between the lines : The Role of Women’s Organization in Sudan”

(分科会参加者 吉川真由、伊関之雄)

2. 本会議

本会議の議論はまず各自の興味関心がどのようなものであるのかということをお互いに知ることから始まった。そのためにそれぞれが作成した開発に関わるペーパーに基づいてプレゼンテーションを行った。それに加え、質疑応答、ディスカッションが活発になされた。このセクションを通じ、新しい視点を各自が得ることができたように思われる。報告者自身の私見ではあるが、日本の男性はとかく女性の社会進出に対する意識が低いように思われた。アメリカの女性はこの意識が強く、女性の社会への参加がいかに大事であるのかということが日本人の間でよく理解されたと言える。

また会議中にフィールドトリップとしてマイクロファイナンスを行っているNPO団体 “PlaNNet Finance” を訪問し、事務局長のロン・ベバクア氏よりレクチャーをいただいた。このフィールドトリップを通じ、マイクロファイナンスとは何かという

ことについてより深く理解することができた。特に過去ならびに現在具体的に行われているプログラムを伺うことにより、貧困の削減に対して具体的にどのように関わってゆけるのか理解できたことが、このフィールドトリップの成果であったと言える。

上記のごとく一通り各自の興味関心が共有された後、どのように各自の考えを発表に反映させていくかということが問題となった。そこでひとつの問題にフォーカスし、その問題の中でそれぞれの問題意識を反映させていくことにした。そして、数ある問題の中からエイズ問題について考えることにした。これは多様な問題が存在する中で、比較的私たち学生にも身近な問題として考えることができると考えたからである。問題の考察を進める方法として、政府、企業、NGOによるエイズ問題への取り組みに関する問題点とその解決策について議論を重ねた。この議論を通じ、エイズ問題についての各アクターによる貢献の可能性を探ることができたと感じると同時に、それぞれの興味関心が反映されたと感じた。

しかしメンバーに共通する想いがあった。それは、私たち「個人」がいかにして具体的に問題解決に貢献できるのかということだった。

そこで具体的に、個人による問題へのかかわり方としてどのような方法があるのか、ということについて話し合った。その中で最終的に、フェアトレード、マイクロファイナンス、CSR（企業の社会的責任）、これらの枠組み、仕組みを通じていかに個人が関わっていくことができるのかということについて検討した。

同時に、一般の方に対して発表するということから、ただ取り組んできたこと、考えたことを話すだけでは興味を持っていただけないと感じた。そこでそういった方々の注意を引くために “skit” と称される寸劇を発表に織り交ぜ、検討したことについて発表することになった。

最後に討議で感じられたことについて述べる。まず発表を一定の形にしなければならないという制約上、コンセンサスを優先したため議論を深める時間が足りなかったことが反省点の一つである。また、どのように伝えるのかという方法論に多くの時間が

第4章 分科会活動

割かれてしまったことも然りである。一方、異なる背景を有する学生10人がお互いに考えをぶつけ合い、それをひとつの形にまとめられたことはひとつの成果であったと感じられる。また最終的に議論が具体的な形でなされたことにより、個人としての問題への関わり方が明確になったと言える。よってもうひとつの成果として、具体的な形にして個人のアプローチを提示できたことを挙げる。

以上が本会議での議論を通じての感想であり、報告である。

(分科会参加者 古屋佑樹)



東京での分科会の様子

3. ファイナルプロジェクト

京都サイトに入ってから、本格的にファイナルプロジェクトの準備をスタートした。ファイナルプロジェクトとして、これまで貧困問題の解決方法として上げていたCSR、フェアトレード、マイクロファイナンスの3つを紹介した。しかし、この3つをどのようにして聴衆にわかりやすく紹介するかが問題であった。ビデオやパワーポイントなど様々な方法があったが、どれもじっくりくるものはなかった・・・。

最終的にはスキットを使うことになった。7分間をフルに使って、私たちRTの1ヵ月間の成果を出すことは容易ではない。いかにして“見せるか”がポイントであった。CSR、フェアトレード、マイクロクレジットの3つのアプローチ方法を、ただ単純に良い面ばかり強調することだけでなく、ネガティブな面も含めるようにして、できるだけ多面的な視点を取り入れようと努めた。以下がスキットの台詞である。

Mayu: Hi, Gurpreet! What took you so long?

Gurpreet: Sorry Mayu! I was shopping. So were you, I see!

M: Yeah, I got lots of cool stuff—a shirt, a book, a towel... And it was all Fair Trade!

G: Fair Trade stuff is a little too expensive for me...

FairTrade1: Did someone say Fair Trade? I know all about that! If you buy Fair Trade goods, it guarantees that the producer in the developing world got a fair price for their labor.

FT2: For example, the normal market price of coffee fluctuates, but the fair trade price is always fixed, so it gives the producers security.

Slide: picture of fair trade product

G: But I don't see why you would buy Fair Trade products.

M: What do you mean? I want to help the developing world any way I can!

G: If you go to developing country to volunteer and build a house with your own hands you are *really* helping people. But a Fair Trade hat looks just like any other hat except for the Fair Trade label. You can't see the results of your actions when you buy Fair Trade goods. Why do you want to keep buying these products?

M: I'd like to go to another country someday, but right now I am busy with school and my boyfriend. Fair Trade may not be making something with your hands, but you can make development a part of your everyday life, like by always buying fair trade coffee. I feel satisfied with my actions when I buy Fair Trade products because I know that my money is going to a good cause, even if I never really see the result.

G: But we consumers need lots of goods and services provided by non-Fair Trade companies. Fair Trade companies are still quite rare. I wish there was some way to find out if regular

companies are helping out the poor...

CSR1: But there is a way to see what companies are doing for development. It's called a Corporate Social Responsibility report. Many corporations practice CSR which means that they try to improve their community or society. If you want to see the results of your spending, you should buy products made by companies practicing CSR.

G: Do all businesses practice CSR?

CSR2: Unfortunately, no. It does cost money, after all.

M: But, many companies have started practicing CSR because it gives them a good image.

G: But the company itself writes the CSR reports, right? Aren't the reports biased?

CSR2: Yes, they are. However, there are some "watchdog" organizations which keep track of companies' actions. CSR may not be perfect, but it's one way we can work for social change with our everyday habits as consumers.

G: I think it is good that a corporation or government would want to help people in developing countries, but that has its limitations too.

M: Everyone wants a better life, but without the resources and will to realize that hope... Maybe there is a way to help people help themselves. Hmm... That makes me think of microfinance.

G: Microfinance?

MCR1: Microfinance is a way to help the poor help themselves. Most of the world's poor don't have access to basic financial services like savings, loan and insurance. So, they can't prepare for the future, buy the things to start a business, etc. Most loans are less than 250 USD.

G: But governments and NGOs already spend billions in aid. I don't see why the poor need *more* money in the form of loans.

MCR2: Traditional aid is very important, but in

many cases years of aid have not alleviated poverty. The poor may become dependent on aid. By accessing microfinance one becomes an active part of the economy in a sustainable way. It empowers people to make change for themselves.

G: But it takes more than a loan to make a business! The transition from poverty to active involvement in the economy must be a tricky thing.

MCR1: That's true. Luckily many microfinance lending institutions also provide free trainings on how to use their services, start a business, use computers, etc. In some cases loan officers visit their clients every week to make sure they are doing well. Good microfinance isn't just about money, it's about people.

M: Wow, cool! Then microfinance would make people much more independent and empowered.

G: That's right! There are many ways to empower ourselves and others!

M: We can involve ourselves in development in a way that fits our lifestyle.

G: Yeah! Let's sit down and drink some Fair Trade coffee!

プレゼン後のQ&Aセッションでは、様々なコメントをもらうことができた。

(分科会参加者 間橋大地)



ファイナルフォーラムの発表の様子

4. 総括

Innovative Approaches to International Development. 開発：貧困撲滅への新たなアプローチ。このようなテーマを設定した理由は、過去と現在のアプローチをしっかりと学びながら、学ぶだけにとどまらず、貧困撲滅というテーマを自分自身に引きつけ、一個人として取り組むべきか、もしそうであればどのように取り組むことが出来るのかを探りたいという考えが根本にあった。

更に“innovative”という言葉を用いる事で、一つの答えがある訳ではないということを確認し、今まででは考えられないような視点やアプローチだとしても、分科会メンバー10人で柔軟にクリエイティブにこのテーマについて議論がしたいという気持ちがあった。

議論をする際に、「開発プロジェクトが行われる現地の人々の気持ちを尊重する」ということを重視し、プロジェクトを進めることが重要だが、相手の現状、更に相手の気持ちを把握することは非常に難しいというジレンマを皆で感じていた。貧困の現状を理解し、相手の気持ちを想像するために、多くの方々と勉強会をさせていただいた。それぞれ異なるきっかけや考えを持ち、開発という分野で活躍されている方々と議論をさせていただいたことで、「貧困」の現状には様々な形があり、一つのアプローチが最も有効ではないということ、そして私達自身もそれぞれが開発という言葉に対して異なる価値観を抱えていることに気付かされ、大変刺激的であった。貴重なお時間を頂き、私達を開発の現場に近づけて頂いたことに心から感謝したい。

結局貧困の解決法を探しても、一つの答えは見つからない。探す事自体に疑問を持つこともあるかもしれない。貧困というもの、そして貧困からの脱却のための開発という概念も、決して自明なものではなく、創り出されたものに過ぎないのかもしれない。「開発プロジェクトが行われる現地の人々の気持ちを尊重する」という考えを重視するからこそ、このようなもどかしさを感じた。

しかし私は、このもどかしさこそ重要であるので

はないかと思う。これが正しいと信じ込み、物事を進めることは、確かに精神的に落ち着き、自信を持つことが出来る。しかし、新たな困難が発生した時、求められる成果と異なる方向へ進んでしまった時、軌道修正は難しい。そして、いつの間にか正しいアプローチを達成しようと「現地の人々の気持ちを尊重する」という発想自体を忘れてしまう可能性も持つ。そうであるならば、常にもどかしさを感じつつも、現状を理解しようと、そして相手の気持ちを想像しようと務めること、これこそが私達が会議を通じてたどりついた答えなのではないかと思う。ファイナルプロジェクトの劇を作成し、適切な台詞を考える際に分科会メンバー一人一人が丁寧に取り組んでいた作業がこれを表す。お互いとコミュニケーションを取ることによって、想像力は膨らみ、可能性は大きく広がった。

基本的なことであり、シンプルではあるが、日々の生活でも現状を理解しようと、謙虚さを忘れずに相手の気持ちを想像しようと心がけること、そのプロセスにおいて様々な方と協力すること、これが私達がたどり着いた新たなアプローチであるのではないかと思う。

私自身、一生をかけてこの作業に取り組んでいきたい。

(分科会コーディネーター 廣瀬裕子)



開発分科会のメンバー

メディア：グローバル社会の影響力

Media Influence on Global Society

分科会メンバー

安田雅治*

金 大鐘

佐藤逸美

竹内菜緒

土岐吉史

Brian Miller*

Susannah Davidson

Jessica Hutchins

Tsz “Jess” Kiu Liu

Bethany Marsh

(*はコーディネーターを示す)



分科会概要

現在メディアは確実に力を増している。科学技術の進展により、その影響力は簡単に国境を越える。世論の流れを、投票行動をも変えてしまうこともあれば、マーケティングと広告戦略により消費行動にも深い影響を与える。インターネットの浸透により今では個人も発信者になりえる。情報科学、通信技術の進歩は加速し、新しい可能性も膨らみ続ける。もうメディアなしの生活など考えられないだろう。そもそもメディアとは何だろうか。そこに流れるものには真実とそうでないものが混在し、時に容易に人を傷つけうる。本分科会では、メディアの持つグローバルな社会への影響力に注目し、日米のメディアの違い、メディアと市民との間にあるべき関係性について理解することを目指した。

事前活動

春合宿5月3日(木)～5月5日(土)

期待と不安のなか、春合宿ではじめてメディア分科会の日本側メンバー5人は顔をあわせることとな

った。ここから59th JASCの事前活動がスタートする。まず自己紹介をし、互いを知り合うことからじまった。それぞれの「メディア」についてのビジョンを共有し、分科会のテーマについて議論した。広島サイトで日米の平和への意識の違いと相互理解をテーマに日米共同でドキュメンタリー作品をつくり、それをFinal Projectの日本側案とすることになった。さらに、アメリカ・エルマイラ大学学生と英語でディスカッションする機会を得た。

防衛大学校研修6月22日(金)

6月の防衛大学校研修の分科会セッションでは、分科会コーディネーターだった大山優君を始め、8人の防衛大生と「イラク戦争とメディア」のテーマで討論を行った。防衛大、JASCともにそれぞれプレゼンテーションを行い、それにもとづいて議論を進める形式で行われた。防衛大側は、戦争報道における政府とメディアの関係について、イラク戦争時の日本の報道各社と政府との取材協定をもとに発表した。JASC側は「国際政治の場におけるメディア(ソフトパワー)の影響力」のタイトルで、竹内菜緒

第4章 分科会活動

が発表した。

Online Meeting

毎週、メッセージャー、スカイプなどを利用し、インターネット上でメディア分科会のミーティングを行った。5月から日本側ではじまり、6月からはアメリカ側と共に10人で行った。まずは互いを知ること（特にアメドリと）からはじめた。事前活動やRT paperの進捗状況と内容のシェアリング、連絡事項の伝達をした。本会議の議論のテーマと進め方についてディスカッションし、Final Projectのアイデアを話し合った。

RT paper

日米の分科会メンバーは、事前活動期間に自分の興味分野に関してRT paperという形の論文にまとめた。RT paperは本会議の議論の土台となるもので、各自の知識の整理と補充、興味分野の関心向上を目的とした。日本側は英語で6ページ程度を目標とした。なお、アメリカ側で毎年行っているRT paperのコンテストで、メディア分科会のSusannah Davidsonが1等を受賞した。

事前勉強会・企業訪問

本会議に向けて各自の興味を深め、知識と見識を高めるためにメディア分科会で事前勉強会を開いた。分科会メンバーでドキュメンタリー作品、ビデオの上映会や、Final Projectの議論やRT paperの相談会をした。しかしそれだけでは不十分であり、専門家の意見を聞くため、そしてメディアの現場を実際に見るために企業訪問や外部講師を招いた勉強会を4回行った。

1. Dr. Jonathan M. Hall 勉強会6月16日(土)

講師：カルフォルニア大学アーバイン校助教授
Jonathan M. Hall博士

2. TBS訪問6月20日(水)

講師：株式会社TBSテレビ 報道局取材センター
外信部 田勢 奈央 様

この日はJASCアラムナイでもある田勢様に案内していただき TBSの夕方のニュース番組「イブニン

グ5」の本番をスタジオで見学したほか、報道フロアやスタジオ、副調整室なども見学した。その後、日本のテレビ業界、ドキュメンタリー制作についてお話を聞いた。

3. 電通訪問6月27日(水)

講師：株式会社 電通 第8営業局 吉野 次郎 様
汐留の電通本社を訪問し、電通のマーケティング・広告戦略について、具体的な事例をもとにお話を伺った。吉野様はJASCアラムナイでもあり、過去のJASCのお話もして頂いた。この日は金大鐘がコーディネートをした。

4. NHK訪問7月5日(木)

講師：NHK スペシャル番組センター チーフプロデューサー 宮本 英樹 様

NHKスペシャルなども制作されている宮本様にお話を伺った。日本とアメリカのテレビの違いや、NHKの公共放送としてのありかたについてお話を聞いた。学生による日米共同ドキュメンタリーについてアドバイスを頂いた。竹内菜緒がコーディネートをした。

Dr. Jonathan M. Hall 勉強会

6月16日、日米会話学院にて、UC Irvine助教授でありJASCアラムナイのJonathan Hall氏による勉強会<参加型講義・ディスカッション 使用言語：英語>を行った。Dr.Hall氏はメディア・映画・比較文化の研究が専門で、今回メディア分科会で「映画からとらえるイメージ分析」について日本、北米の実験映画を見ながら、そこから何を読み取れるのかを文化比較をまじえながら分析していく、という趣旨の元で勉強会を開いた。

私たちメディア分科会の“Media Influence”という題目について、そもそも“Influence”とは何か、という所から講義は始まった。Influenceとは何らかのpower（権力）で人々の思考に影響を及ぼすものである。そこで、“イメージ”という媒体が大きく関わっているということ。私たちは映画や広告、新聞によって多くの“イメージ”を目にしている、無意識のうちにそれらを吸収している。

本番でドキュメンタリー映画製作を目論んでいる

私たちが、今回の勉強会でドキュメンタリー映画をつくる意義を再確認できたと言えども、同時に映像の難しさや、社会的責任の重さを感じた。しかし、自分達には多くの仲間の支えがあるので、本合宿に向けて頑張っていきたい。(竹内菜緒)

本会議7月26日(木)～8月20日(月)

議論の流れ

分科会セッションは毎回、次の3部構成ですすめられた。

- 1) メンバー各自のRT paperの発表とそれをもとにしたディスカッション。議論の準備の時間を考慮し、1日の中でアメリ1人とジャパデリ1人の2人が発表した。
- 2) Final Projectの話し合い
- 3) フリートピック。事前活動期間中のOnline Meetingで、デリゲートが挙げていたトピックの中から選び議論した。(国際政治とメディア、好きな映画etc.)



RT paper題目一覧 (発表順)

東京サイト 7月29日(日)

Bethany Marsh: "CNN Effect"

佐藤逸美: "The Challenge of Japanese Newspaper Industry"

秋田サイト 8月5日(日)

Jessica Hutchins: "The Affects of Fashion on Global Societies"

土岐吉史: "The analysis on the strategy of

SOFT POWER"

秋田サイト 8月6日(月)

Tsz "Jess" Kiu Liu: "The Bigger, the Better?"

金 大鐘: "Report of the U.S. journalists from abroad: Its deficiencies and resolutions"

秋田サイト8月7日(火)

Susannah Davidson: "Asian Americans in Film and Television: The Road to Shattering the Stereotypes"

竹内菜緒: "Media Imperialism: Globalization of Mass Media"

広島サイト 8月10日(金)

Brian Miller: "International Media Reporting of 9-11 and the Aftermath"

安田雅治: "Secrecy and Openness: Two different minds on Media"

フィールドトリップ7月31日(火)

講師: NHK スペシャル番組センター チーフプロデューサー 館谷 徹 様

前々日が参議院選挙という、放送業界は大変な繁忙期であったのにも関わらず、館谷様の特別のご好意によりこの日の企画は実現した。分科会メンバー10人でNHKを訪問した。まず、局内を案内して頂いた。報道フロアや副調整室、スタジオを見学した。7時のニュースのセットでは、実際にどう撮影・放送するか説明を受けた。アナウンサーの席に座り、自分がモニターに写る姿を見る機会も得た。その後、Q&A形式で館谷様とディスカッションをした。NHKと民放との違い、日米のテレビの違い、報道と政治の圧力、ジャーナリストの適性とは、など、テーマは多岐に渡り、時間はあっという間に過ぎていった。

Tokyo Bayside Break 7月30日(月)

メディアRTはNHK訪問の日程が他のRTのフィールドトリップとずれていたため、他のRTが出かけているこの時間に余裕が生まれた。1人の提案はすぐに全会一致するところとなった。品川にある、27階のパーティールームにメディア分科会全員で出かけ

第4章 分科会活動

た。ここからは東京湾が一望でき、お台場は目の前だ。一同すばらしい眺望に感激し、それまでの過密日程からはなれ、リラックスタイムを過ごした。会議が始まってまだ5日目、この日は日米双方の総合的な理解、会議中のRTの抜群の仲の良さにつながる絶好の機会となった。

Final Project



世界に広がるメディアの影響力に注目した。中でも世界で大きな位置を占め、会議参加者の出身国でもある日本とアメリカのメディアにフォーカスし、メディアの理解をはかった。そのために日米の新聞を比較調査した。なぜなら新聞ははまだ信頼性が最も高く、かつ最も人々に求められているメディアだからである。

【目的】

日本とアメリカで、メディアに扱われているトピックの違いを明らかにする。

【調査対象】

新聞のヘッドラインを、その日の一番大きな順に5つ。それを会議後半の10日分集めて比較した。新聞は日米から4紙ずつ（全国紙3つ、地方紙1つ）をピックアップした。

日本：読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、京都新聞
アメリカ：USA Today, New York Times,

Washington Post, Los Angeles Times

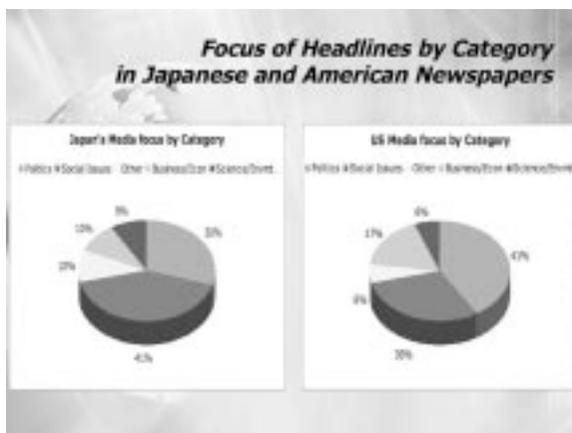
【仮説】

1. 政治に関する記事はアメリカが日本より多い

2. アメリカの方が日本より国際的なニュースを扱っている（ただし自国に関わるもののみ）。

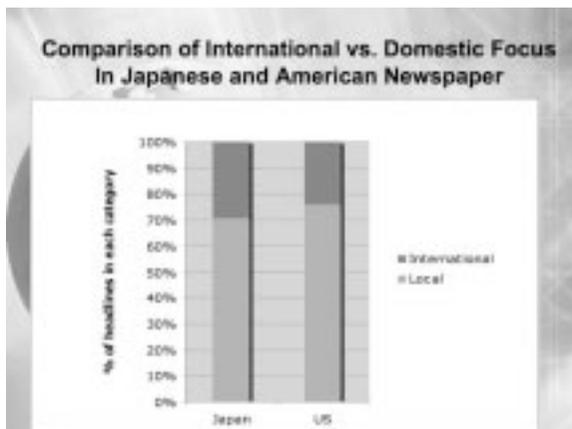
【調査結果】

- ・日本はアメリカよりも、国際ニュースに関心がある。
- ・アメリカで扱われているトピックは予想よりはるかに多様だった。
- ・両国で関心が持たれている分野
→日本：社会（国内） アメリカ：政治



【調査の過程で分かったこと】

- ・社説・コラムはアメリカより日本で重視されている。
- ・紙面の本の広告から、日本の方がより知識層に向けた紙面づくりがされているように思われる。



【総括】

調査をするうちに多くのことに気付かされた。ヘッドラインを探すのにも苦労した。インターネット版とプリント版は多くの点で違った。新聞各紙の紙面構成、国による違いなど数えきれない。やはり一番の問題点は、調査に使用したサンプルの少なさだったろう。日本は社会面で扱われる記事が目立った。予想はずれ、国際ニュースは日本の方が多かった。アメリカでも多くあるが、それはアメリカ人が関心を持つものに限られていた。アメリカはよく自分の事しか関心がないと言われていたが、それが反映したのだろうか。アメリカでは地方紙の方に重点がおかれ、日本は全国紙が幅をきかせている。日本の紙面作りが、より知識層を意識したものであったのは、個人の文化・選択の文化のアメリカとの違いを表していたのではないだろうか。メディアの差から見えてきたものは、そのまま、それぞれの社会の違いであった。

最後に

Final Projectのプレゼンテーションに至る道は、決して平坦なものではなかった。はじめはアメリカ側との議論のやり方の違いに日本側は戸惑った。日本人は結論まで考えてから話し始めるが、アメリカ人はまず話し出し、話しながら考える。そのため議論のスピードは早い。東京サイトで夜に日本側5人だけで今後の進め方について話し合ったことがあった。しかし、気付くと後半は恋愛の話で終始してい

たのは、いい意味で当分科会の性格を反映していたのかもしれない。

Final Projectは新聞の比較調査であった。しかし本会議まで、日本側はドキュメンタリー制作を考えていた。日本側、アメリカ側双方にドキュメンタリー制作、ビデオ、写真を経験しているメンバーが何人もいたし、本会議前にOnline Meetingで分科会として一応の合意があったので、実現可能だと思われた。しかし、会議が始まると、日米の意識と思惑には隔たりがあり（米国側はよりシンプルなるものを望んでいた）、Final Projectのテーマの議論をやり直さなければいけなかった。これはコーディネーターとしても大きな誤算であり、事前のコミュニケーションの難しさを認識させられた。

最後に分科会が良いものになったのは、メンバーのユニークさとみんなの仲の良さだった。真面目だけど、お茶目でカラオケ好きのプライアン。シニカルなスザンナ。笑いが絶えない大和撫子のベサニー。元気でいつもトップギアのジェサ&ジェス。似顔絵と物まねがうまいテジョン。たよれるイツツ。がんばりやのナオ。関西の風を入れてくれたトッキ。また、みんなの笑顔に会えるのは、そう遠い日ではないはずだ。



暴力と平和：武力行使に対する価値観の再考

Pacifism and Belligerence: Examining the different perspective on the use of force

分科会メンバー

杉山亮太*
上野良輔
角田亜紗子
高野恭平
渡辺恭子
Andrew Ruffin*
Jessica Lee
James Piller
Joshua Schlachet
Joshua Turner
(*はコーディネーターを示す)



分科会概要

暴力は人類の歴史から切っても切り離せない。暴力が暴力を生む悪循環は繰り返されてきたが、平和主義は実現可能なのだろうか。なぜ紛争やテロはなくなるのか。こうした疑問に答えるべく、当分科会では現代における紛争、テロ、戦争について原因と過程を考察し、国家はもちろんのこと国際機関や非国家主体の役割にも注目して議論をする。日米安保の是非など日米間の武力行使に対する価値観の相互理解を深めるとともに、イラク戦争、コソボ紛争、核抑止、9.11などを背景に現実的な平和の可能性について考えていきたい。

事前活動

1. 富澤暉教授 勉強会 5月19日(土)

元陸上自衛隊幕僚長で現在は東洋学園大学理事兼客員教授の富澤暉氏を訪問し、「アメリカの軍事的退潮はあるのか」と題して、一極化・多極化というテーマを軸にイラク戦争から日本の軍事力の在り方まで、安全保障に関して幅広く講義をして頂いた。新しい発見の詰まった講演会であったが、同時に

が国を取り巻く安全保障環境の厳しさを改めて痛感した。いつの世も国家の平和を維持することは難しい。「政治とは最も悪くない方針（方法）を選ぶこと」とは、フランスの政治家マンデスの言葉である。国家を守るためには、限られた人員、予算、時間の中で、その時代における最善の手段を選び続けるしか方法はない。

2. ピースボート 渡辺里香さん座談会 5月20日(月)

ピースボートにおいてGPPACのプロジェクト担当をされている渡辺里香さんと座談会を行った。GPPACとは、Global Partnership for Preventing Armed Conflictの略で、紛争予防のために世界各国のNGOが連携したネットワークを築き、地域ごとに作業部会を設けて国際会議を開催し、それらをまとめて世界提言を作成している非常に興味深いプロジェクトである。暴力と平和について個人としてできることを考えたかとしては、この予防の文化を作り出すことに重点を置く視点は答えを提供してくれているかのように思えた。

3. 岡崎久彦氏 訪問

岡崎氏は日本版NSC（国家安全保障会議）構想の



富澤教授を囲んで

メンバーで、実体験に基づいた意見交換をして下さった。岡崎氏は、集団的自衛権は国家が国連から約束されている権利であるためそれを否定する日本の現憲法（憲法9条）は矛盾しており、日本とアメリカの外交関係の妨げとなっていると説明した。特に、もしも日本が集団的自衛権を認めるのであれば、日本とアメリカの同盟は一層密なものとなり、アジアでの日本の地位の確立へも繋がることもおっしゃった。私個人としてはこれら意見に賛成できなかったが、政府に助言する彼の意見は政府の見解なのであるから興味深かった。

4. 広島市立大学広島平和研究所 浅井基文所長 座談会「憲法9条と集団的自衛権」

関心のある広島の大学生や高校生も交え行われたこの座談会において、浅井氏は、武力により平和を構築するという考えが国際政治において支配的だが、核兵器の出現によりそれは限界を迎えており、9条のように力によらない平和の考えが説得力をもつと指摘された。世界で頻発する暴力の原因を探り、それに対し非軍事的手段で対処することの重要性も強調された。さらに、日本が9条を理由に国際的な軍事貢献から逃げてきた事を指摘し、逆に力によらない平和がいかに本質的なものなのかを世界に訴えていく必要があると言及された。集団的自衛権に関しては、北朝鮮脅威論を取り上げ、米朝の軍事費が100対1という事実を例に挙げ、どういう条件下でアメリカが他国から攻撃をされ得るのかということ

にも目を向け議論しなければならないと指摘し、脅威論は日米軍事同盟を正当化させるためのフィクションに過ぎないとした。正当防衛や人権擁護における武器使用についての質問に対し、民族の存続をかけて自衛の闘争をする場合にも軍事力という暴力を使用するかには議論の余地があるとされ、平和創造と暴力の微妙な関係を認識するとともに、改めて武力行使自体が抱える問題の複雑さを痛感した。

5. 分科会レポート提出

Andrew Ruffin:

“The Future of the Japan-America Security Alliance”

James Piller:

“The Rise of Asymmetric Conflicts and the Usefulness of War”

Jessica Lee:

“Current Generation’s Views on ‘Japaneseness’ and Rising Sense of Nationalism”

Joshua Schlachet:

“Victims of History: Individuality, Narrative and the Future of Pacifism in the Japan-America Partnership”

Joshua Turner:

“A Former United States Marine’s Perspective on: Violence, et al.”

杉山亮太:

“Comparative Analysis of Humanitarian Intervention Towards Ethnic Conflicts”

上野良輔:

“Japan’s Security Framework for the 21st century ~Missile Defense, Non proliferation Regime of WMD, Nuclear Armaments~”

角田亜紗子:

“Peace within our Ninth Article”

高野恭平:

“The Peace Test”

渡辺恭子:

“City of Peace, Hiroshima, and the Thought Towards Creating Peace”

本会議活動

1. 藤原帰一教授講演会および座談会 7月29日(日)

「平和のリアリズム：武力行使に対する価値観の再考」というテーマで講演をいただいた後、分科会メンバーと少人数ディスカッションを行った。米国覇権主義の見直しの重要性、国連改革の必要性、東アジアの安全保障と核兵器の問題および日米のリーダーシップの必要性など多岐に渡った。民主主義の定着を通して世界平和を構築するという米国の政策が見落としているのは、反米国政権が正当な政治的手段で擁立されていく可能性であり、アメリカが今後不人気な政策を続けることになれば、民主化の波を中東において作り出せたとしてもそれは逆にアメ



藤原教授を迎えて

リカの首を絞めることに他ならないという印象的な指摘もあった。また、効率的かつ戦略的に行われた戦争ほど正当化されやすく、戦争の記憶が多様な価値観のもとで語られていく限りにおいて、人間は今後も戦争と平和の繰り返しから脱却することは難しいという指摘もされ、当分科会が向き合う課題の難しさを痛感することとなった。

2. 靖国神社および遊就館へのRTフィールドトリップ 7月30日(月)

アメリカ側参加者と共に静謐な美しさの中に荘厳な雰囲気を漂わせる本殿に祀られている英霊の方々に思いを馳せ、将来における日本と世界の平和と安定を祈念した後、遊就館の展示を見学しながら議論

することができた。今回の訪問や議論を通して、改めて現在日本が抱えている歴史認識問題や靖国神社参拝問題を国家間の争いの種にはならないと痛感した。この問題には、個人的な感情、ナショナリズム、政治的・経済的な思惑、国家の威信などが複雑に絡み合っており、日米・日韓・日中間ではもちろん、日本人の間でさえも捉え方に違いがあり、相互理解が難しい。私は、たとえ他国が外交問題として追求してきたとしても、これらを外交問題として捉えずに、多国間で相互理解を図れるよう努力しつつも、解決には時間を要するデリケートな問題であるという認識に立って、慎重に外交の舵取りを行わなければならないと思う。

3. 分科会セッション：

RT#1-3@Tokyo: Introduction, RT paper presentation, RT Goals, and RT Final Project

初めて全員で顔を合わせてのセッション。自己紹介、平和について考えるきっかけとなった個人的な経験、RTレポートの内容、分科会における興味分野や目標といったことについて各自発表をし、まずはお互いのことを理解することから始めた。事前活動から活発にメールやSkypeを通して話し合ってきたが、こうして円になり英語で議論するのは新鮮に感じられ、興奮するとともに緊張してしまった。Joshua.TのRTレポート後には、イラク戦争をケーススタディとして「君ならどうするか」といった議論もあり、非常に興味深かった。他のRTレポートの内容をここですべて紹介することはできないので、ホームページ等で参照してほしい。

RT#4-5@Akita: Memory of War and the Domestic Issues Regarding Peace and Security

第二次世界大戦の記憶のされ方の違いと9条の問題について話した。特に参議院選挙直後であったため濃い話し合いとなった。WW2に関しては、日米間の歴史認識の相違、あるいはアジアから見たWW2の視点など、日本がいかにWW2を捉えていくべきかについて意見が割れた。また、9条の話合いでは、9条改正の問題を①9条が隔てる日本の保

障問題、②自衛隊に絡めた9条が持つ違憲的性質、③9条と日本に求められる国際的役割との矛盾という3つの視点から考えた。その中で、9条は世界に日本が宣言した国際条約という認識や、自民党の改正案では9条だけでなく個人の権利が公共の善の為に制限されうると改悪されている点も紹介された。

RT#6-7@Akita: The International Approaches towards Peace

私たちは世界に目を向け、国連が国際社会の中でどうあるべきかなどについて議論した。はじめに国連の問題点を多角的に探るため、それぞれの国から見た国連像を発表し合い現状把握に努めた。ここで個人的にとっても興味深かったのが、世界唯一の超大国であるアメリカと国連の関係についての意見である。アメリカは国連があまり機能していないと考え失望しているが、裏を返せば、その見方はアメリカの単独主義を国連がある程度抑止できている証拠とも言えるのだ。その後、国連をより平和に貢献できる機関にするために、アメリカは、そして日本はどう貢献すべきかについてそれぞれの視点から意見を出しあい、これからの国連のあり方を模索した。

RT#8@Akita: Additional Roundtable Discussions

今後の方針を相談するとともに、日本やアメリカ国内におけるより広い意味での暴力と平和の問題、ならびに人道的介入の倫理と先進国の役割について考えることとなった。アメリカの銃社会の病理、差別や貧困の問題を露出したバージニア工科大学での銃乱射事件、大統領選挙を通じた世界情勢への変化についてなどの議論だけでなく、昨今の米ドル下落の理由や、イラク戦争や二重赤字に伴う債務の激増が世界に与える影響といった国際政治経済的分析にまで及び、“Tax, spend Democrats” “Don’t tax, spend Republicans”といった政治批評も飛び出した。また地域紛争のいくつかを例にとり人道的介入のあり方と、その倫理判断の曖昧さに起因する危険性について議論した。「人間の安全保障」を第一義的に考えた介入の手続き整備の必要性、それを違反した際の罰則規定および国際司法裁判所の役割強化

の必要性を認識した。

RT#9-10@Hiroshima: Pros and Cons of Nuclear Weapons and Hiroshima

まず、私たちは貧困のために話し合いや外交で物事を進展・解決する術を知らず、それ故にテロ行為という暴力を利用して自分達的意思や意見を通そうとしているのではないかと考え、貧困と暴力との関係性について話し合った。テロなどの深層原因は、米国支配からの脱却と貧困であり、構造的暴力が社会に存在する限り、暴力はなくなるのではという意見もあった。続いて、原爆投下について意見が交わされた。私たちは、Josh. Sが作成した原爆投下に関する動画を基に意見交換を行い、核兵器の非人道性、原爆投下の是非、核廃絶の方法などについて話し合った。「アメリカは市民を攻撃目標としていた」という事実が米国政府外交秘密文書公開によって明らかにされており、原爆投下の必要性に疑問を感じた。また一方では、冷戦中に原爆が使用されなかった事を引き合いに出し、あの段階で世界が核兵器の破壊力を実体験できたことが、国際的な視点からはいい効果があり、将来的な世界のために広島・長崎は犠牲を払った価値があるという意見を述べる者もいた。核軍縮及び、核兵器廃絶に向けての取り組みに関しては、核保有国のアメリカと被爆国日本がパートナーシップを組んで取り組めば、実戦的かつモラル的なリーダーシップを取ることができ、理想的だとされた。原爆が投下され、そして平和を希求する広島で平和と暴力について話すことは有意義かつ深いものであった。

RT#11-12@Kyoto: Total Reflection/ Final Forum Preparation

1ヶ月話しあってきたことを何度も洗い直し、どの議題を紹介したいかを羅列しランクを付けしていき、最終的に5つの議題に絞った。またファイナルフォーラム後には、分科会メンバー十人十色の平和についての意見やその形成の過程を載せたカレンダーを作成する事を決めた。今回のフォーラムにおいてはその前段階となる、「それぞれが平和を作るた

第4章 分科会活動

めに貢献できるのだ」ということを印象付けるような文章を寄稿したものを印刷して来場者に配った。

4. ファイナルプロジェクトおよびファイナルフォーラム発表：

ファイナルフォーラムでは、10分という限られた時間的制約ゆえ、全てのディスカッションについて説明するのではなく9条問題、靖国問題、核問題、人道介入問題、日米のグローバル化でのリーダーシップについて話した。そして、平和の形成の仕方の答えを紹介する時は、分科会内で出た意見のうち異なる5つを台詞のように紹介した。

- ・9条問題：9条に関わる3つ問題（安全保障・違憲的性質・世界での日本の立場の確立）を挙げ、憲法9条が日本国内の問題ではなく国際的な問題として取り扱わなければならないということを説明した。



メンバーの結束

- ・靖国問題：靖国神社訪問を通じた考察。私たちは遊就館と本殿の2つともに入ったのだが、そこで感じるナショナリズム的な雰囲気の違いを説明した。そして、残念ながら靖国が政治的に使われている事実とA級戦犯者たちの東京裁判が靖国の存在に大きく影響を与えたことも紹介した。
- ・核問題：広島で大きく扱われた原子爆弾については、現在世界が抱えている核不拡散問題と原爆投下についての日米での歴史認識の違いを紹介し

た。この議題は私たちの分科会内で意見が一番分かれた話し合いだったので、結論は出さずに出た意見を羅列していく形をプレゼンテーションではとった。

- ・人道的介入問題：紛争などの起こっている国や地域への人道的介入の問題の説明では、カンボジア、ルワンダ、ダルフルへの介入例を挙げ、成功例が低いことも示した。他にも、介入することにより現れる国内と国外でのプラスファクターの違いが存在することも言い、短期間での結果を目論む介入はよくないという結論に至ったことを話した。
- ・リーダーシップ：日米が世界でリーダーシップを取れる事柄として異なるスタンスを取っているからこそ、ソフトとハード両面から核問題について働きかけられることを説明し、両国がもっとPKOに力を入れるべきだとも結論付けた。

ファイナルプロジェクト

[平和に対する10人の考察] (抜粋)：

Andrew Ruffin: “My realistic vision of peace can be achieved when we are willing to intervene in conflict zones despite a lack of national interest.”

Jessica Lee: “Peace is very difficult to achieve because it goes against our basic instincts and human nature... Yet peace is not impossible to achieve. In fact, peace is everywhere... at home, at work and inside us.”

James Piller: “War is a failure to negotiate with your adversary, and a failure to understand them. War should always be the last rational option.”

Joshua Schlachet: “The cycle of war and peace is not a natural one. Each new conflict is the product of human decisions in a time of tension. Thus because we always have the capacity to make better choices, war is never inevitable”

Joshua Turner: “Under current conditions peace would be merely the lack of conflict. When that is achieved it would be reasonable and expected that our definition of peace would change and evolve.”

杉山亮太：“As Coffie Anan stated, *from reaction to prevention* is the key to peace, and that is where each individuals can act as an actor for peace...On the process of building a relationship or environment that prevents conflicts/wars from happening is possible.”

上野良輔：“Working and acting for world peace within the multinational framework based on the effectiveness of legal, moral and military approaches as a member of the international society, even if it includes the use of force, is the fulfillment of pacifism and will mean to be ranked in an honorable status in the world.”

角田亜紗子：“In order to construct peace, not only Japan and America but the world needs to realize and understand that ‘violence’ for peace does not and cannot coexist.”

高野恭平：“We live in an unequal world. To achieve peace, we have to recognize that there are rich people and poor people and that it is important for the rich to help the poor achieve their peace, too.”

渡辺恭子：“I think that peace is when people can live without feeling that they are in danger of death. Everyone in the world is a peace-builder.”

分科会総括：



分科会のメンバー

・米国側参加者 Jessica Lee

Being a part of PBRT was an amazing experience.

It had the right combination of rigorous debate and building mutual understanding between the American and Japanese delegates. We discussed many tough issues but felt comfortable enough to be forthcoming and to speak our minds. I learned a lot from my fellow delegates and wish we had another month to continue our discussions

・日本側参加者 高野恭平

分科会の目的は、世界中の暴力をさまざまな角度から検証することで、何かしらの真実を見つけ、それをもとに政策提言などの情報発信をすることであった。そのために、分科会では惜しげもなく時間すら忘れて自らの意見をぶつけ合ってきた。時にはまったく話がかみ合わないこともあった。泣き出してしまう参加者すらいた。私たちはみんな同じく世界平和を目指しているはずなのに、それに至る過程は全くといっていいほどかけ離れていたのだ。こうして私たちは価値観の違いを学んでいったのである。これは当初の目的の半分は達成できたといえる。しかし、残りの情報発信などそれ以上のことは何もできなかった。それではこの分科会は失敗であったのか。私はそうは思わない。日米学生会議はこの夏で終わりだが、私たち参加者はこれからも生き続ける。これからの人生の中で、私たち各々がこの分科会で学んだことを社会に還元できたとき、初めて成功と言えるのではないか。そして、私はそうなることを確信している。リーダーを始め、素晴らしい参加者たちとともに真剣に議論できたことを私は誇りに思う。

分科会ホームページ：

<http://groups.google.com/group/PBRTJasc59?hl=en>
こちらにて各分科会メンバーの分科会レポート、事前活動報告、本会議中の写真、分科会セッションの議事録、平和に対する考察全文、ファイナルフォーラムプレゼンテーション等が掲載されています。ぜひご覧ください。

教育：次代を担う市民の育成

Creating a Global Citizen: Education Focused on International Concerns

分科会メンバー

菅家万里江*

菊池なつみ

武田尚樹

本郷亜紀

山本詩乃

Kendall Jackson*

Lindsey DeWitt

Jennifer Eusebio

Mia Monnier

Hidemi Tanaka

(*はコーディネーターを示す)



分科会概要

グローバル社会の到来は、自国だけに留まらない社会的、文化的、政治的問題をそれぞれの市民が主体的に考えていかなければならない時代の到来を意味する。様々な人種が混ざり合い、共生していくことが求められる中で、自分と違う肌の色、目の色、宗教、文化、歴史を持った他者をどのように理解し、どのように彼らと向き合っていけばいいのか。テロリズム、環境問題、貧困問題など、ボーダレス化する諸問題に対する個人の参画をどのように促していけばいいのか。それらの指針を与えるものとして、当分科会では、教育を取り上げ、その現状と可能性を考える。教育の、個人の人格形成及び価値観形成に対する影響力を土台として、「グローバルシティズン」像の模索とその方法論を考えていくことを目的とする。

事前活動

Field Trip

国際理解教育に対する見識を広めるため、以下のようなフィールドトリップ (FT) を行った。このFT

では、分科会コーディネーターだけでなく、参加者も主体的にFT企画に参加し、自ら勉強会をコーディネートした。主なFT先は以下の4つである。

文部科学省FT

文部科学省国際化応接室にて、国際統括官付国際統括官補佐の大村様、初等中等教育局国際教育課国際理解教育専門官の都築様、及び大臣官房国際課総務係長の平田様よりお話をうかがった。

まず大村様より、学校教育にゆとり教育が組み込まれた経緯、またゆとり教育の理念についてうかがった。ゆとり教育や、国際関係について子供たちに教えることの重要性、異・多文化共生社会の理念を教育に上手く取り入れている藤沢市の例などをうかがえたことはとても意義があった。しかし、ゆとり教育には決まったカリキュラムや必須事項はなく、その内容は教師の裁量にゆだねられるため、カリキュラムの柔軟性を高められ、授業における教師の裁量の幅が広がった反面、教師の負担も大きくなり、その理念と現状には大きな隔りがあることを強く感じた。次に、都築様よりESD (Education for Sustainable Development) についてうかがった。



これは持続可能な開発に向けて活動している様々なアクターをEDSというひとつの傘の下に集約しようという考えである。この教育理念は、日本の学習指導要綱にはまだ取り入れられていないということであったが、世界がグローバルな規模で縮小していくにつれ、「持続可能」という理念を教育にしっかり取り組んでいくことは重要であると感じた。また、今回お話をうかがった方々の中には、日本の子供における学習意欲の低下を障害のひとつと考えられている方もおり、グローバル市民育成にはまだまだ考慮しなければならない課題も多いと感じた。

ユニセフFT

まず、「ユニセフの任務や世界の現状などに関するビデオを鑑賞した後、講師の方のユニセフでの経験についてお話をうかがう」といった国際理解教育のような授業をシミュレーション的に体験した後、担当者の方の国際理解に対する見解をうかがった。このFTを通して地球市民とはなにか、国際理解とは何かという部分について理念的なお話を多く聞くことができ、大変勉強になった。

また、どうすれば表面的な知識の理解に留まらず、子供たちの行動を促していけるのか、という質問の答えとして、担当者の方は、コミュニケーションの重要性を挙げられていた。すでに問題を知っている者や現場に行った者が、国際理解教育を通じて、まだそれらの問題に触れたことの無い子供たちに世界の現状を伝え、その子供たちが、他の子供にそのことを伝える、そのうえで全体的に「国際問題のため

になにかしよう」という風潮が生まれれば、一人ひとりは動きやすくなる。このようにコミュニケーションによって相互に影響しあえば、自然と意識が変化していくのではないかということであった。以上のことから、学校は閉じられたコミュニティとしてのイメージが強いが、やはり学校外のアクターの存在は大きく、彼らが積極的に学校現場の国際教育に関われるように学校とそれらのアクターが関係作りをしていくことが、国際理解教育にとって重要であると考えた。

JICA FT

教育に学校外のアクターとして積極的に参加し、児童の国際理解に貢献している団体のひとつにJICAがある。JICAは青年海外協力隊に参加した人達を積極的に学校の授業に派遣したり、開発教育教材などの貸し出しを行ったり、ホームページ上でJICAの活動を紹介したりしている。特に今回勉強会で訪問させていただいたJICA地球ひろばは、市民による国際協力の拠点として様々な啓発イベント、展示を行っている。

分科会参加者全員が特に強く感じたことは、JICAが“生きた経験、生きた情報”を来訪者に提供しているということである。これは「グローバル市民の育成」という分科会の目標にとっても大切な視点であり、学校教育にこういった企業やNGOなどが現場の声を多く取り込むことがこれからのグローバルシティズン教育に必要であると感じた。しかし、JICAの基本はODAを中心とした海外援助であり、学校教育との連携に必ずしも積極的なばかりではなく、あくまで副業的に行っているというお話もうかがい、学校教育への外的なファクターの巻き込みは近年進んできてはいるが、まだまだ課題が多いと感じた。

京都教育委員会

この勉強会では、京都は日本でも有数の観光都市であり、外国人観光客、留学生の割合も高く、学校にも多くの国際理解教育が組み込まれていることを学んだ。例えば、様々な学校で英語教育が初等レベルから始められており、地元の留学生を学校に招いての交流事業も積極的に行われている。しかし、京

第4章 分科会活動

都市教育委員会の方のお話によると、京都市が一番重点をおいていることは「地域ぐるみでの教育」であり、地域における伝統文化や環境問題をしっかり学びそれを発信していくことが国際化の時代に大切なことだとおっしゃっていた。特に印象に残ったのは、学校を核に地域コミュニティの再生をというスローガンの元、地域住民や、家庭にも焦点をあて、学校運営協議会などを設け、地域住民と共に子供を育てていくという姿勢であった。これはグローバル化が進む中、同時に必要になる、ローカルな視点、愛郷心などを育てる上で非常に重要な理念であり、京都における先進性の起因するところのように感じた。

<週末ミーティング>

春合宿後、毎週末にスカイプまたはmsn messengerにてミーティングを行った。前半は日本側参加者のみで日本語にて行われたが、後半では練習のため英語にてミーティングを行ったり、アメリカ側の参加者も交えるなど、事前活動の中核を成した。ミーティングでは、各活動の反省、分科会の方向性決定、ファイナルプロジェクト（FP）等について活発な議論を交わした他、分科会メンバーの近況報告の場としての役割も果たした。これにより、日本側のメンバーの半数が東京以外の出身という状況の中、全員が会議前に親しくなることが出来、本会議中の分科会活動を円滑に行うことができた。また、毎回、本分科会の日本側参加者である武田尚樹が英語にて議事録を作成し（本会議間近では、アメリカ側参加者の田中英実も同様に議事録を作成してくれた）、それをアメリカ側にシェアすることで、日本側とアメリカ側の情報格差を緩和することができた。本分科会の成功の裏には、この二人の事前活動からの貢献があったことをここに銘記しておきたい。

本会議活動

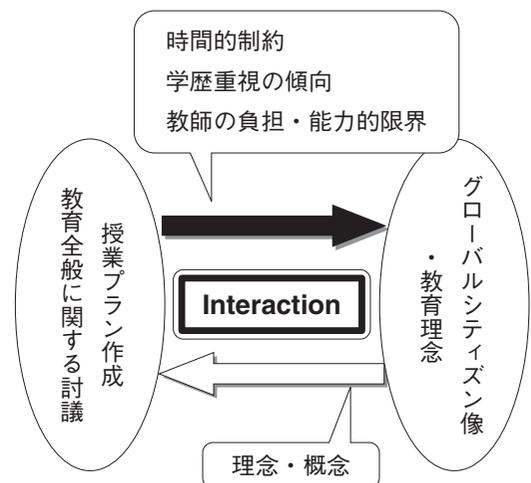
分科会の流れ

本会議では分科会のセッションを計14回行った。最初のサイトである東京サイトでは、自己紹介や本会議までの日米双方の意見の共有、これからの活動方針決めを中心に行った。その後、本会議前から、

FPとして作成する予定であったブックレットの構成作りに着手した。

場所を秋田に移してからの6回は、ブックレット作成に当たって議論の根幹となるグローバルシティズンの定義（詳細は後述の「ファイナルプロジェクト」を参照）についての議論に入った。

ブックレットは、大まかに、地球市民の定義、地球市民育成教育の重要性、具体的教育課程の提案、実際の授業計画で構成されている。「地球市民」という抽象的で大きな概念を主題にした議論やその成果を、いかに現実世界に還元することができるのか、という分科会の統一見解に鑑み、そして、現在、小中高等学校で実施されている「総合学習の時間」の不安定な実状を踏まえて、総合の時間を利用しての教育課程やモデル授業を考案した。具体的な授業内容は、各自が事前に作成していたRTペーパーの発表を通して、議論・検討を行った。企業、地域コミュニティ等、学校内に留まらない様々な教育へのアプローチ方法や、地域経済格差が問題解決を困難にしている環境問題や開発問題や愛国心教育といった具体的な教育の内容について、じっくりとブレインストーミングをした。その結果、私たちは、地球市民育成の教育を、政治・経済、文化、環境の3本柱で捉えることが決定した。次に効果的な指導方法を模索するために、授業展開について議論を進めた。



こうして、秋田サイトのうちに、ブックレットの構成や内容を決定し、各メンバーで役割分担することができた。今振り返れば、ブックレット作成に関する議論は、地球市民や地球市民教育の実体やその重要性、必要性についての主題だけでなく、授業というものを狭い範囲で捉えている現在の学校教育の問題点を注視し、改善策を考える良い機会となったと言える。

広島での2回は、ブックレット作成だけでなく、「教育」という広い分野から、バウチャー制度による教育の市場化、学級崩壊、入学方法、塾の存在等日米双方の教育問題について自由討議した。これにより、教育全体からグローバルシティズン教育を見ることとなり、自分たちの討議してきた内容を批判的に振り返る契機となった。

京都で開催されたファイナルフォーラムでは、事前活動や約1カ月の議論の成果をスキットし、発表した。教師から生徒への呼びかけ、外部アクターからの講師の招聘、テーマの設定など、私たちが考えるグローバルシティズン教育を具体的な形にし、スキット形式で発表したことにより、より分かりやすく、ライブな雰囲気での成果をフォーラムの来場者に伝えることが出来たと思う。

ファイナルプロジェクト (FP)

当分科会では、議論の成果をブックレットとして集約し、関係機関に配布することを最終目的とした。ブックレットの内容は、地球市民の定義などの理念的な部分と、実際のカリキュラム及び授業プランなどの実践的な部分で構成された。教育の専門家ではない学生の意見がどれほど価値を持つのかという点で、不安を感じた参加者もいたが、以下の三点により、当分科会がオリジナルな視点を持つという結論に達した。まず、私たちは、現在の教育制度を直接体験したばかりの（若しくはしている）学生であるということ。次に、私たちの視点は、日本とアメリカの様々な背景を持つ学生の視点を組み込んでいるという点でユニークであるということ。第三に、私たち自身が、世界市民の問題について積極的に話し合う世界市民であり、他の人々が世界市民に参加するきっかけになりたいと願っているということ。こ

れらの点から、作成されたブックレットは価値があるものだと考える。

尚、ファイナルフォーラムでは、ブックレットを要約したパンフレットを配布し、発表の理解の助けとして活用してもらった。

以下、当日配布したパンフレットの日本語の要約を掲載する。

地球市民とは何か？

地球市民とは、相互に依存しあい、関連しあう世界において、社会全体の目標のために動こうとする意志及び、そのためのビジョンを持つ個人のことである。

地球市民は、地球規模の問題に関心を持ち、そこから生じる様々な結果を自分の問題として捉える。そして、自国内及び地球規模、双方の経済、政治、社会、文化そして環境問題に対する平和的解決に対して、それぞれが貢献できる範囲において、責任を持ち、自ら進んで行動する。

さらに、地球市民は自分自身の人生の文脈にとどまらず、それを超えて物事を考えることのできる能力を持ち、他文化を受け入れ、尊重し、機会を見つけ相互理解の促進に努める。

地球市民教育にできること

1. 生涯学習のための基礎的かつ必要不可欠な知識技術を提供する。
2. 理論と実践をつなげる。
3. 批判的思考力を身につけさせる。
4. 安全な環境の実現のための、討議すべき、意見の分かれる重要な問題を生徒に紹介する。
5. 市民社会において能動的な参加者になるように生徒たちに動機付ける。

グローバルシティズン教育とその学習の単位

環境問題

☆地球温暖化とエネルギー保存

☆持続可能な開発

☆ゴミ問題とリサイクル

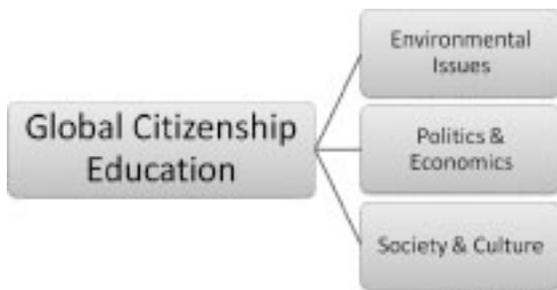
政治と経済

☆政治システム比較

☆国際経済

☆グローバルイゼーション

第4章 分科会活動



社会と文化

- ☆アイデンティティーと団体
- ☆文化的歴史と宗教的伝統の比較
- ☆芸術や映画などのメディア

バランスのとれた教育へのアプローチ

教育者が地球市民教育を行うときは、以下の4つの基本的事項に留意すべきである。

1. 愛国心：自国を愛することと世界全体について正しく理解することの両方に同程度の重点を置く。
2. 平等なジェンダー表現：歴史や文化において、潜在的にジェンダーバイアスがかかっていることを認識し、全ての領域において男性の重要人物、女性の重要人物について教える。
3. 人種とマイノリティーの差別：文化内部における「違い」、異文化間の「違い」の両方に対して、敏感になるように促す。
4. メディアリテラシー：批判的思考力を育ませるため、様々なメディアの幅広い視点に生徒が触

れることができるように努める

コミュニティ活動（コミュニティアウトリーチ）

地球市民は教室内での学習によってのみ育まれるものではない。地球市民として、自国の国境を越えた問題に対し、責任を持てるようになるには、まず、個人レベルで、一人の人間として互いにどのように関わっていけばよいのか学ばなければならない。

幼いときから子供たちに、自分たちの環境では普段会うことの少ない人々や、彼らの持つ様々な考えに触れさせることで、彼らは生涯を通じて、思いやりを持ち、心の広い人間になる。

また、地域のコミュニティに焦点をあてることによって、地球市民教育は、サポートネットワークを提供し、新しいアイデアが取り入れられる快適な空間としての役割を果たす。

60分の授業例

0～10分	何故、環境保護が大切なのか？（小グループディスカッション）
10～15分	人間性と環境保護の重要性についての小レクチャー
15～25分	ドキュメンタリー「不都合な真実」鑑賞
25～40分	「先ほどの映像はある問題に対する自分の見方を変えたか？」などディスカッション
40～50分	地域レベルの環境問題について生徒自らができることを考える。
50～60分	ただ捨てられたゴミとリサイクルされるゴミがその後どのように処理されるか学ぶ
ホームワーク	1週間分のリサイクル可能なゴミを持ってこさせ、自分個人の方がどれだけ環境に影響を与えることができるのか、実感させる。

総括

この章では「教育：次代を担う市民の育成」分科会の総括と称して、分科会コーディネーターの立場から、分科会の内容及び運営について言及したい。

<分科会の内容に関して>

「グローバルシティズン」。この言葉が人口に膾炙してからまだ日は浅いが、このコンセプトはすでに多くの人が理解しているのではないだろうか。グローバル化によって、我々は、国や個人の生活のレベルを超える大きな問題に直面したり、自分と異なる背景を持つ人々と生活を共にしたりすることになった。そのような現代社会へのアプローチとして「次代」「育成」に焦点を当てたのがこの分科会であった。

宗教、愛国心、環境、ESD、地域密着型の教育など、この分科会が対象とした分野は多岐に渡った。その包括する範囲の広さを知るほど、「まだまだこんな可能性もある」、と嬉しく思う反面、教師のキャパシティ、時間の制約など、現実的な問題にも直視することとなった。

また、「いくら国際理解教育を行っても、それが子供たちの行動を変化させるほど大きな影響力を持つことは稀である」、といういわば「教育の限界」というものにも直面し、教育とは何か、その意義とは何か、という問いにそれぞれの参加者が真剣に向き合うこととなった。そのような状況の中でも、「一人を変えなければ世界は変わらない」、という信条を持ち、一人でも多くの生徒が国際的な問題に関心を持つよう、フィルムや文学、外部からの講師の招聘など様々な方法論を討議しあった。

また、具体的な授業内容を考えるだけでなく、その生徒がグローバルシティズン教育の課程を修了したとき、「相互に依存しあい、関連しあう世界において、社会全体の目標のために動こうとする意志及び、そのためのビジョンを持つ個人」になれるよう全体的なカリキュラムも考案した。これを事後活動としてブックレットにまとめ、私たち分科会の成果として社会発信し、現代の日本の教育に何かしらの貢献が出来ればと考えている。

最後に、この分科会を通して気がついたことは、

日米学生会議そのものが、この分科会のテーマと合致することである。我々はこの会議を通して分科会を考え、この分科会を通して会議の意義を知ることになった。そして、その先に見えてきた道、それは、我々のこれからの人生の歩み方そのものが、この分科会の成果とも言えることである。我々は自分たちが見聞きする情報に「教育」され、少しずつ変化を遂げていく。その先にはきっと、我々が描いたグローバルシティズン像を、より大きなインパクトを社会に与える形で具現化した我々がいるのだろう。その意味で、この分科会は終わらない。

<分科会の運営に関して>

当分科会は、周囲の評価を鑑みるに、非常にスムーズに行った分科会のひとつではないかと考える。この項では、分科会コーディネーターとして、当分科会運営のために行ってきたこと、成功したと考える部分、及びその問題点について言及したいと思う。個人的見解ながら、この文章が後代の実行委員の分科会運営に少しで役立てば本望である。

当分科会運営の出発点となったのは、第58回日米学生会議で所属した分科会への疑問と不満であった。もちろん、個人としては非常に楽しめたし、最高の思い出となっているが、参加者としては運営に関して若干の不満があったことは否めなかった。それは主に以下の3点に集約される。

- ・分科会の方向性決定に関する不満
- ・米国側との見解の相違
- ・FP決定過程に対する不満

まず第一点についてだが、分科会の方向性がすでに春合宿にて決定されていたところに不満があった。個人としては、文化に関する様々な事象を話し合いたいと考えていたのだが、春合宿にて「文化に関する“問題”を解決し、何かしらタンジブルなプロジェクトを打ち上げなければならない」、と聞き、正直戸惑ってしまった。そのため、本分科会では、参加者に主体的に分科会の方向性を設定してもらおうと考えた。もしそれが本分科会の当初の方向性と相違しても、アメリカ側と交渉して、その案を通す覚悟も出来ていた。そのため、春合宿前にメッセージにて会議参加者とミーティングをし、分科会

第4章 分科会活動

の方向性と宿題を参加者に決定してもらった。(そして、その結果、プロジェクト型の分科会運営を行うことが決定した。)参加者としては、日米学生会議で何をするのか具体像が描けていない状態で、このような作業を行うことは非常に困難であったと思うが、この作業により、参加者とコーディネーターとの間に存在する、分科会の運営に対する責任感のギャップを埋めることにもなったと考える。また、その後も毎週末ミーティングを行うことで、分科会の内容の充実と、参加者を分科会運営に積極的に巻き込むことに成功したと考える。

また、第二点目の米国側との見解の相違に関してだが、昨年の会議では事前に米国側との交流があまり行われず、最も大事な「サブカルチャー」の定義についても日本側と米国側で異なっていたため、用意してきた資料及び発表内容がかみ合わないことがあった。それを防ぐために、当分科会では、距離的・時間的に優位な日本側参加者の総意を「日本側からの提案」として米国側に提示し、それを叩き台として米国側が意見を出し、双方の意見を反映させるという形式をとった。その具体的な実行例として、毎週末のミーティングの議事録を米国側に送った。これによって、日本側と米国側の意識・見識の差を埋められたと考える。また、このことは本会議で劣勢に陥りがちな日本側参加者が分科会においてイニシアチブをとることにもつながったと考えられる。

次に、第三点目のFP決定過程に関して言及したい。昨年の分科会では、FPで何を行うかに関して、事前活動期間では決定しておらず、ファイナルフォーラムが近づいた時に、「何が出来る？」と話し合っただけでHPの作成を決定した。その議論の過程においては言語による米国側参加者の優位があり、なかなかこちらの考えを伝えられなかった。そのような事態を防ぐこと、及びプロジェクト型の分科会運営が決定した以上より完成度の高い成果を出すため、本会議前に日本側がイニシアチブをとってFPを決定出来、かつ事前準備活動がFPに集約されるような枠組み作りをした。これにより、本会議中の

分科会の時間を具体的なFPの内容作成に割くことが出来た。

以上、去年の経験から今年度の分科会運営に向けて改善した点を3つ挙げ、それぞれに関する意見を述べさせてもらった。最後に、問題点に話を移したい。最善の努力を尽くしたつもりだったが、残念ながら問題点もあったことは否めない。最大の問題であったのが、FPを作成に本会議の分科会の時間のほとんどを使ったことに対する不満である。参加者主体で分科会の方向性を決定したため、全ての参加者の意見を吸収することが出来たと思っていたが、本会議が後半に入った頃に、「グローバルシティズン教育」に特化するのではなく、「教育の平等とは」などといったもっと一般的な意味での教育に対して意見を戦わせたかった、という声が上がった。このようなことを防ぐためには、①事前準備段階での意見吸収により多くの時間を割く、②1ヵ月程度のスパンで、方向性を修正する必要性をコーディネーターが積極的に参加者に呼びかけていく、③本会議中の分科会のスケジュールに、バッファーを設け、より柔軟な分科会運営を行うこと、の三点が挙げられるだろう。③に関しては、分科会以外の時間に任意で集まって議論をしたり、個人でそれぞれ新たなトピックに対してリサーチをしたりすることで解消できるようにも考えられるが、暑さの中連日の過密スケジュールをこなす参加者に必要以上の負荷を与えることは委員として避けたいと考える上に、経験的にそのようなことが行えなかった事実を鑑み、分科会の時間内にそのような時間を設けることは必要であると考えられる。

以上簡単ながら、分科会コーディネーターとしての視点から本分科会について述べさせてもらった。学業、秋田サイト、副実行委員長の仕事と当分科会の運営を両立させるのは大変だったが、当分科会のコーディネートが出来て、この分科会のメンバーに会えて本当に幸せだったと心から思う。個人的な感想が入ってしまったが、これにて教育分科会の総括を締めくくらせてもらう。

ナショナリズム：国への思いと排外主義

Nationalism: Patriotism or Xenophobia?

分科会メンバー

加納康宗

立川仁美*

松田浩道**

望月進司

李 凌韻

Hiroyuki Miyake**

Jasmina Dizdarevic

Rachel Mason

Ryan Urie

Nancy Xu Yang

(*事情により事前活動のみの参加)

(**はコーディネーターを示す)



分科会概要

アメリカのネオコンや日本の右傾勢力と呼ばれる人々の台頭はともに国境を越えた関心を集めている。近年では靖国神社や教科書問題をめぐっても議論が活発だ。これらの現象を我々はどうのように理解すべきか。ナショナリズムは時に排外主義と結びつき、否定的にとらえられがちであるが、ナショナリズムと排外主義の関係はいったいどのようなもののだろうか。教育、歴史、政治、経済、国際組織、地域統合など様々な側面からナショナリズムを考察し、議論を行った。

事前活動

靖国神社、遊就館訪問

日時：5月20日(日)

靖国神社の方に神社の歴史と理念についてお話をいただいた後、遊就館を案内していただいた。神社が戦没者の慰霊を大切にして活動を続けてきたこと、戦没者の思いを現代に伝えるために展示活動をしていることを学んだ。

【参加者後記】

前半の歴史解説においては一般的な本・メディアに書いていることとあまり変わらなかったように思う。とても興味深かったのは後半部分の質問から浮かび上がってきた靖国神社の“姿”。

「展示内容の変更は諸外国の外圧によるものではなく、定期的に行っている変更の一環」「靖国の理念に賛同してもらうことではなく、“共感”してもらうことが大事。それは戦死者の遺品や遺された人々の言葉から感じ取ってもらえば。」「靖国神社としては議論が世の中に起こるのは大いに結構。しかし、関与するつもりはない。」

戦争から60年以上が経過し、当時を知る人々が少なくなっていく中でいかにして靖国神社としてのアイデンティティーを確立していくのが今後重要になってくると感じた。新たなアイデンティティー確立の核となるのが人々にどのようにして“共感”を広めていくことではないか。靖国神社が主張する戦争に対するロジックは諸外国に限らず、国内においても批判を受けることが多い。しかし、その一方で、戦死者やその遺族の中には靖国神社を支えにして生

第4章 分科会活動

きてきた人もいるのも事実だ。彼らが亡くなると次に靖国神社を支えるものが、戦死者の無念さに対する“共感”であるように思う。となると、今沸き起こっている靖国論争も賛成派・反対派ともに、識者と呼ばれる人々がただ、自らのロジックを展開しているだけであり、次の世代に自ら考えるきっかけを放棄させているようにすら私には見える。諸外国の反応、戦争肯定とは別の次元でわれわれ次世代は靖国神社を捉えなくてはいけないのだと強く感じた。

(立川仁美)

中国・韓国人留学生と話す会

日時：6月18日(月)

国に対する感覚は国によってどのように異なるのか、また、歴史問題に関する意識は実際にどのように異なるのかを探るため、韓国と中国からの留学生に話を聞く機会を設けた。

【参加者後記】

6月18日、月曜日の夜に僕達ナショナリズム分科会は東京大学本郷キャンパスの安田講堂前に集まり、「中国・韓国人留学生と話す会」を設けた。全員が集まった後、僕達は中央食堂へと移り、食事をとりながらディスカッションを始めた。食堂が午後9時に閉まった後は近くの喫茶店で僕らは話を続けた。

個人的に、特に印象的だったのは日中韓の自国の歴史に関する考え方についての話だった。僕の理解するところでは、その議題でポイントとなった点は：①歴史(国史)の重要性と②国家政府に対する信頼、この2つだった。便宜上、簡略化してしまうと、日本人は①「国史にそれほど重要性を感じない」②「国家政府への信頼が強い」のに対し、中・韓は①「国史に強く重要性を感じる」②「国家政府を信頼している」という風に僕には感じられた。

従って、日本の場合、①「国史の単一性・正確性に重要性を感じないためその編纂は民間に任せ、教科書も多様でよい」②「国家政府を信頼していないために、国史の編纂を政府に任せるのは危険であり、それは民間に任せ多様なものにすべき」という論理が見られた。それに対し中・韓は①「国史の単一性・正確性は不可欠であるため、国史及びその教科書の編纂は国家政府に任せるべき」②「国家政府を

信頼しているため、国史及びその教科書の編纂は国家政府に任せるべき」という考え方をしている、という風に僕は感じ取った。その時僕は、「日本の場合、戦前・戦時中のトラウマと、それによって高められた言論の自由・政府からの自由への意識の高さが影響しているのかな？」と、そんなことを少し想像したのを覚えている。

上のような歴史やナショナリズムの話以外にも、基本的には参加者が話したいことを好きな様に話した、というざっくりぼろんなイベントとなり、特殊で、面白くて、楽しい時間だった。(望月進司)



参加したメンバー

三菱商事訪問

日時：6月25日(月)

経済ナショナリズムについての勉強会の一環として、世界中に進出している企業から見たナショナリズムの姿を調査するため、品川のオフィスにお邪魔して三菱商事の山本哲也さんにご自身が関わってきた外国での仕事の経験を中心にお話を伺った。

【参加者後記】

今回の話で特に関心を持ったのは、「ビジネスをやる上で国柄、文化はそれほど関係ない」というものだった。お話によると、よく「日本企業は意思決定が遅く、態度が曖昧」などといわれるが、本当に重要な案件に関してはすぐに決定することもあるし、逆に、海外の企業でも曖昧な対応をする場面もよくあり、決して真実ではないようだ。また、実際にビジネスの現場で働いている人々にとって、国に対する感覚というものがそれほどビジネスの場面で

現れてくることはなく、あくまでもどのような商品をどこに売るとどれだけの利益が出るか、というビジネスの視点でものごとが動くという。

国ごとで企業の仕事のやり方の違いというものがあるから存在すると漠然と感じていた先入観を正しいきっかけとなった。また、普段企業の活動を知る機会がなかなかなかったため、あやふやな「国に対する感覚」などとは一線を画して一貫したビジネスの論理でものごとが動く世界を垣間見たことは印象的だった。(松田浩道)

いちごアセットマネジメント訪問

日時：6月27日(水)

東京の九段下にあるいちごアセットマネジメントを分科会で訪問した。社長のキャロン氏と清水さんに「日本的経営」をめぐるお話を伺った。

【参加者後記】

私がRT Paperで“日本企業”像を扱うこともあり、訪問の目的は「ハゲタカ」との違いや日本文化への適応を強調する(日本専門)外資ファンドから見た日本企業像や日本の経済ナショナリズムの可能性を聞くことだった。しかし1時間半のインタビューで他にも色々なお話が聞けた。以下にその要約を書く。

「日本的経営」は見ると人のスタンスによって変わる。戦後システムなのか、または文化なのか。これを混同しては議論も混乱する。しかし法人(corporation)に対する日米の姿勢の違いは明らか。存在意義を収益に置き、経営者が株主に“your company”という米国、そして社会的意義を大事にして“our company”という日本。しかし同時に企業は株主の貯蓄も預かっている。

途中、短い時間ではあったが社長のキャロン氏が加わった。いちごは「狭く深く」投資し経営者とともに“our company”と言って行動すると揃って強調され、更にキャロン氏は「ニッポンのために働きたい!! 企業価値だけでなく社会貢献も!!」と笑顔でガッツポーズをされた。この「ニッポンのため」だが、実はファンド関係者と企業だけの話ではない所が重要である。年金基金はファンドによって運用されており、今や高齢社会と超低金利時代を迎えた日本でそれは切実さを増している。しかし実際には日本人の巨大

な貯蓄が高齢者の本来不要であるべき苦勞によって国外に向けられる現状がある。多数の高齢者がベトナムへ口座を作りに行くのはその典型であり、その解決にもいちごの存在意義があると強調されていた。

キャロン氏が打ち合わせで抜けられてからは清水さんと4人で様々な事を話した。日本企業と外資の比較はもちろん、“いちご”の名前を巡るいきさつ、日本のファンドを巡る事情、かつて勤務された米系投資銀行、SOX法(内部統制)、そして仕事観といった話題にまで及んだ。私たちの将来を考える上でも非常に興味深いフィールドワークだった。

(加納康宗)

アメリカ大使館訪問

日時：6月27日(水)

国が自由をアピールする際、どのようにナショナリズムがあらわれるのだろうか。この点を探るため、アメリカ大使館にて、広報担当の方にお話を伺った。

【参加者後記】

今回の訪問の目的は各国のPR方式からそのナショナリズムを探るというものであった。米国大使館からは2人の方にスピーチをいただき、その後質疑応答を行った。スピーチの概要はおおよそ(1)米国外務省における広報システムの全体図、(2)各国に対する広報姿勢の違いと日本における広報姿勢の詳細、(3)報道翻訳と日本の反米言論に対する危惧、の三点にまとめられる。質疑応答では回答からアメリカ民主主義への肯定を伺うことができ、ナショナリズムの片鱗が示された。また、米国留学と親米意識の相関性にも触れ、必ずしも比例する訳ではないことを確認した。

広報システムの全体図を丹念に説明してくれる大使館側の姿勢が興味深かった。理念を説明というよりも、事実の活動に基づいた説明、データを用いた演説がスピーチの大半を占めた。理論的に構成されたセッションで理解しやすく、質疑応答でも気取らず率直な態度で応じてもらった。日本の反米言論に対する危惧はいささかオーバーにも思えたが、政府間の安定した関係を一般世論によって壊されたくない気持ちが伝わった。「問題解決国家」というようにアメリカを説明する彼らに、立場ゆえではない

第4章 分科会活動

愛国心が伺えた。全体的に見ると、スピーチ、質疑応答共に議論が多岐に及び、大量の情報が交わされた。参加者それぞれが自分の興味をそそる何かを抽出できた勉強会だと思う。(李 凌叡)

本会議

本会議では、初日に出し合って整理したテーマに基づき、以下の枠組みで議論を行った。

・アイデンティティとナショナリズム

各自がナショナリズムを意識するのはどんな時か、参加者それぞれの多様なバックグラウンドも踏まえ各自の経験や意識について共有した。「他者に出会うときにナショナリズムを意識する」という命題が、この時点で既に現れて来た。

・靖国神社訪問準備

フィールドトリップで訪れる靖国神社について、日本側参加者が基礎的な情報をアメリカ側参加者に伝えるという形で準備を行った。日本における死者に対する感覚や、イエ制度など、難しい概念を苦労しながらアメリカ側に説明し、訪問に備えた。

・歴史の修正と政治的利用

靖国神社訪問を踏まえ、歴史を国がどう扱い、利用するかというテーマ全般を議題としたが、遊就館の展示をめぐる見解の違いでやや議論が交錯し、そこに時間の大部分を使うこととなった。歴史認識に関する問題の根深さ、複雑さが浮き彫りとなった。

・戦争責任(暴力と平和分科会との合同セッション)

分科会合同で大人数での議論となった。戦後に生まれた者も戦争責任があるのか、どのような和解のあり方があるのか、意見を交換した。日本における天皇の戦争責任や謝罪問題にも話が及んだ。

・エスニシティ、宗教とナショナリズム

民族的、もしくは宗教的な意識や誇りとナショナリズムはどのように関係しているか、どのように両者を共存させることができるのかというテーマで議論を行った。マイノリティーに対し国家がどの程度寛容になるべきか、文明の衝突は不可避なのかといった議論にまで発展した。

・経済ナショナリズム

資源をめぐるナショナリズムや、国内の経済的な動向がいかに関与するかというテーマでディスカッションを行った。ナショナリズムと保護主義や排外主義台頭の関係などについて、いくつかの事例を挙げながら議論を行った。

・インターナショナリズムとグローバリズム

インターナショナリズム、グローバリズムはどのようにナショナリズムに影響するか、国民国家に取って代わる仕組みは存在するのか。地域統合や究極的な形としての世界政府の可能性、世界市民としてのアイデンティティがあり得るのかというテーマで議論を行った。

・広島平和記念資料館と遊就館

亡くなった方の慰霊を主な目的の一つとし、戦争にまつわる博物館ということで共通点を持つ両者を訪問したことを踏まえ、両者においてどのようにナショナルな側面が取り上げられているのか考察した。戦争の記憶のさせ方の違い、博物館の目的の相違点を確認し、どのように戦争を記憶していくのかということについて意見を交換した。

ファイナルフォーラム

以上の議論を受け、ファイナルフォーラムでは議論を以下のようにまとめて発表を行った。

・導入

ナショナリズムとは掴みがたい概念である。アジアと欧米ではその意味することが異なり、前者は歴史認識と密接に絡み後者は多様性と統合とに密接に絡む。当分科会では主に①民族とナショナリズム、②共有される記憶とナショナリズム、③ナショナリズムの展開、に注目して議論した。以下にそれぞれのまとめを述べ、結語とする。

・民族とナショナリズム

我々は「市民国家のナショナリズム」と「民族意識」の対立を軸として議論した。市民国家は共通の信念や価値観でひとつの主権国家を頂く集団であり、多くの場合は複数の民族を内包する。人は市民国家には統合されるが、その民族性は先天的に決定されている。民族は外部からの期待やステレオタ

イブに応じて強調され、他の民族との対立と市民国家との対立という二種類の対立を起こす。これらの対立に対して、市民国家は、民族間の分裂を共同政権の名の元で統合したり、あるいは全国民に福祉を与えて少数民族の周縁化を防いだりといった方法をとらう。市民国家とは元来、国民を保護したり対立を仲裁したりする働きを持つ概念なのである。



挿絵1 市民国家には様々な民族が内包される

・共有される記憶とナショナリズム

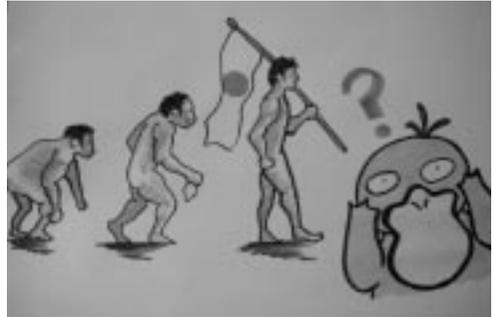
我々は遊就館（靖国神社の博物館）と広島平和記念資料館（原爆資料館）に行き、ナショナリズムとの関係で興味深い対比関係を見いだした。

まず、両博物館の目的が対照的である。靖国神社は戦死者の遺族や友人を慰めるためにあるが、同時に戦死者を追悼するためには戦争従軍者も英雄的に捉える。一方の原爆資料館は亡くなった一般市民の遺族や友人を慰めるが、同時に犠牲者を追悼するために戦争を悲劇として捉える。

次に、博物館の向けられた対象にも大きな違いが見られた。原爆資料館は非核と世界平和を全世界に向けて訴えるのに対して遊就館は日本国内だけに対する訴えとなっている。

我々はアイデンティティーの源泉として国ごとの物語が必要とされることを認めたが、それが他国を軽視するナショナリズムに結びつくことを懸念している。国が関わるかたちで公共の展示をする時は、政府はその中立性を監視するか、少なくとも論争から国家を切り離す努力をすべきである。

・ナショナリズムの展開



挿絵2 ナショナリズム進化論

国家は太古の時代からあったものでも永遠不滅のものでもない。そのため我々は国家に代わる枠組みをマイクロ（草の根）とマクロ（世界政府）の方向性で模索した。

マイクロの方向性としては、IT革命により誰でも意見を表明できるようになることがナショナリズムの感情を草の根的なものにする。マクロの方向性としては、世界政府の可能性とその望ましさを検討した。世界政府の成否は、国家の第一義的な役割をアイデンティティーの源泉と考えるか、単なる保安や福祉の提供者と考えるかによって左右される。保安や福祉の役割を担うだけの世界政府なら想像できても、アイデンティティーの源泉としての世界政府は不可能だし望まれないであろう。

より現実的な話としては、各国共通の利益に注目することでナショナリズムを弱める国際機関の連なりが考えられる。国際機関は、平和的な解決のために国家の利己主義を抑制するという重要な役割を持



挿絵3 国際社会から排除されたコダック

第4章 分科会活動

つ。しかしある国が国際社会から孤立すると（挿絵3参照）、国際社会とその国家の対立構造が生じる。それゆえ、我々は国家が国際的枠組みに沿って責任のある行動をすることが国家にとって実用的であるような状況になることを望むものである。

・結語

分科会では、以下の問いが繰り返し提出された。ナショナリズムは「他者」への反発と定義されなければならないのであろうか。

ナショナリズムが自分自身の国を好むことである以上、「他者」の存在は認めざるを得ない。しかしその「他者」との関連付けが敵意である必要はないしそれは必然でもないだろう。

ナショナリズム分科会の感想 加納康宗

事前活動の議論はいつも楽しくて仕方なかった。全員が全く異なるバックグラウンドを持ち全く異なる意見や思想をぶつけ合う。僕は歴史について「自民党のお爺さん」（日本の保守勢力）みたいな感じだったけれど、全員が論理的・理性的・積極的に発言する空間は最高に面白かった。JASCはやっぱり最高の議論の場だった。春合宿ではRT全体と各自のRT paperの方針が予定時間内にすっきりまとまり、その後は充実した議論やフィールドワークを数多く行えた。効率もレベルも高くて本当に言うことなしかった。JASC全体での評判も高く、鼻が高かった。かつて大学のゼミで尊敬したレールイさんの存在には特に勇気付けられた。絶対的にも相対的にも興奮していた。

RT Paperと大学の期末試験を経て、遂に本会議が始まった。議論は全て英語。複雑な概念などが絡むと発言も聞き取りも難儀した。日本語の音読み熟語に相当する英単語には“？”が続出し、疲れている時は得意な議題を除いて諦めたこともあった。でも日本の事情や歴史を色々と説明できたのは良かったし自分の「役割」を楽しみながら果たせたと思う。不完全な英語に代わるものを見出した気もして嬉しかった。

当然ながら意見は対立する。intensityは秋田で頂点に達した。一番辛かったのは僕ではないと思うが、

議論の中で自分を厄介者と感じるようになった。広島では対立のなかった日を幸運と感じた。しかしJASCは学生が妙な“立場”を感じることなく正直に議論する場であるとの視点からそれではいけないと思い直した。そしたら次の京都でやっと分科会がアットホームになった。なぜだろう……色々考えられるがまともに語るとキリがない。京都でやっと発表に値する合意も色々と出せるようになり、いつしか息苦しさも消えていた。

去年は“tangible result”を課されて四苦八苦したと聞く。でも僕たちはよくやった。発表だけじゃない。本来なら不信と反感で終わるはずの所が相互理解とrespectになった。スピーチでも言った、political and sentimental issuesという最もintense, dangerous なRTがこれだけ誇れる結果を出した。最後の発表はリーダーのヒロ×2に頼らずデリ本人たちが成し遂げた。日米の様子は変われど、まさしく日米学生会議、と言いたい。

事前活動でワクワクし、オリセンでドキドキし、秋田でイライラし、広島で落ち着き、京都でマイホームとなったナショナリズム分科会。JASCで最も長い時間を占めた、我が拠り所。

6年前、カナダのホームステイに何故か別のプログラムで来た韓国人2人がいた。あの2人もアメデリから見たジャパデリ@RTのように対照的だったが、突如始まった議論は互いの英語力と知識の貧弱さから事実上不成立。イライラして終わった。6年後にJASCに出会えるとは夢にも思っていなかった。アダム、ヒロ、みんな、ありがとう。



ファイナルフォーラムでの発表を終えて

「アイデンティティ」の社会学

Opposed Identities : Ideology, Ethnicity and Inequality in Conflict

分科会メンバー

三窪英里*

上田 來

櫻 静香

平井麻祐子

廣田隆介

Justin Long*

Danielle Vocal

Maureen Campbell

Samantha Scully

Sophia Yang

(*印は分科会コーディネーターを示す)

(注) 本文中のIDは、「アイデンティティ」を示す



分科会概要

世界の均質化を推し進めるグローバル化。その潮流に逆らうように人々は自らを規定するイデオロギーや民族、言語、宗教、文化などへの帰属意識を強固にしている。IDを巡って、時に個人は葛藤し、集団間では対立が起こる。IDはどのように形成され、なぜこのように強い力を持つのか。いかにしてIDの対立は回避できるのか。本分科会では、IDをキーワードに日米国内における差別や移民、格差社会、地域社会における問題だけでなく、紛争解決、平和構築といった国際的事例についても議論を進めることを目的とする。

1. 春合宿

分科会の進め方について意見を交わし、全員で共有した。その後、メンバーがそれぞれもつ問題意識や扱いたいトピックについて自由に話し合った。本会議の集大成であるファイナルプロジェクトの方向性については、「IDの衝突はいかにして回避できるか」という命題について個々のID衝突のケースから仮説を立て、考察を重ねた後に、衝突回避のための条件として普遍的なIDを探し出すことで、日本側参加者の意見がまとまった。春合宿において初めて顔を合わせたメンバーであったにもかかわらず、すぐ

に打ち解け、充実した議論が繰り広げられた。早くも日米10名全員で共に分科会を作りあげたいという思いにかられ、期待に胸膨らませた。

2. 事前活動

春合宿後から本会議までの間、各人の興味に沿った事象についてのリサーチ、およびプレゼンテーション作成に加え、ID問題について考察を深めるべく以下の場所を訪れた。ほか、サミュエル・ハンチントン著『文明の衝突』を読み、冷戦後起こる衝突を文明というパラダイムから捉えた著者の論について討議した。

2.1 映画「パラダイス・ナウ」鑑賞

「IDによる衝突をいかに回避するか」という分科会設置の目的に向けて、個々の衝突事例を取り上げ、分析するため、パレスチナでの自爆攻撃問題を扱った作品『パラダイス・ナウ』を鑑賞した。宗教がもたらす民族間の衝突や自己の葛藤について学び、宗教がもたらす人間の憎悪やID観について議論した。

よくパレスチナ問題はイスラム教とユダヤ教の対立という構図で語られがちだが、それらの宗教に属している個人の不満を解決しない限り永久にこの紛争は終わらないと実感した。ゆえに、分科会としてすべてのIDの対立を克服する「普遍的かつ可変的で

第4章 分科会活動

柔軟なもの」を探求しつつ、同時に個人の内面にまでディスカッションの範囲を広げて議論したいと思った。

2.2 東京アイヌ文化交流センター訪問

東京駅の近くにある東京アイヌ文化交流センターに訪問し、アイヌの方々の歴史や現状を館内にある資料をもとに勉強した。館内で鑑賞したビデオにおいて、繰り返し「言語とは民族のIDそのものである」という趣旨の説明がされていたのが印象的だった。アイヌの人々は、明治政府による「和人」への同化政策の結果、古来より日常会話として使用していた彼らの独自の言語を失ってしまった。しかし現在、北海道やその他全国に住むアイヌの人々の努力により、彼ら独自の言語を再び学び、復活させようとする動きがあるという。このように言語を復活させようとするアイヌの人々の姿勢に、彼らが「和人」とは違う独自のIDを誇りに思う気持ちが垣間見られた。

2.3 モスク訪問—イスラム教の学生との交流—

モスクへの訪問時には、初めは私たちがID問題の繊細さに鈍感であったことによる戸惑いもあったが、最後にはイスラム学生と打ち解け合って話し合いをすることができた。特に、「自分のIDの構成比」をテーマにした自己紹介で、自らのIDが100%イスラムで構成されているというあるイスラム学生の発言は、とても印象深いものだった。

この訪問は、私たちがIDに興味を持ちながらも、いかに先入観で他者を判断しているか、またいかにIDの問題に鈍いかということ気付かせてくれ、とても意義深いものであった。

3. 本会議活動

本会議の活動としては、主にフィールドトリップ、各自のプレゼンテーション、ファイナルプロジェクトに向けた議論の3つの柱があった。

本分科会では「IDによる衝突をどのように回避できるか」という命題の下、様々なケースを扱い、毎回の分科会活動の中でいかに充実した議論ができるかを重んじた。そしてそこでの新たな発見が蓄積されたものを、全てファイナルプロジェクトに結びつけたいという思いがあった。そのため、3つの活動の内容やテーマは違えども、いずれも相互に深く関

係し合っている。

3.1 フィールドトリップ

青山学院大学の押村高教授をお招きし、日本のマイノリティ問題についてレクチャーを受けた。また、ナショナルIDについて学ぶべく靖国神社を訪問した。

【押村高青山学院大学教授によるレクチャー】

7月29日、青山学院大学国際政治経済学部の押村高教授をお招きし、レクチャーを拝聴した。日本が「単一民族国家」であることの神話性について、アイヌ民族や沖縄人、在日コリアンなどを例に挙げ、多民族国家としての日本についてお話いただいた。アメリカ人学生だけではなく、日本人学生にとっても専門的な知識を得た上でマイノリティ問題を再考することとなり、新たな発見の多い時間となった。また、移民受け入れによって起こる雇用問題や競争激化といった両国に共通する問題についても質疑応答が活発に交わされ、非常に有意義なセッションとなった。

【靖国神社訪問】

靖国神社訪問では、神殿参拝、遊就館見学、さらに一般の方々の靖国神社に対する意識調査を行った。その中で、より印象に残っているのは後者2つだと思う。第一に遊就館見学では、大きく意見が2つに分かれた。一方は、遊就館を訪れることで、感



靖国神社前にて

情的に動かされ、今までの靖国神社に対する賛否にかかわらず、国のために戦った戦死者を悔む気持ちを感じるメンバー。もう一方は、遊就館がその偏向

性を隠匿するために、人間の感情に訴えるような展示手法を取っていることは教育上良くないというメンバー。靖国訪問後の議論においては、客観的に物事を見ることにまだ慣れなかった私たちは、双方が納得のいく答えを容易に見出すことはできなかった。皆自分が立脚する立場から中々抜け出せず、議論にわだかまりを感じたことも否めない。しかし、そのような議論での困難を何とか切り抜けようと、必死でお互いの立場になって考えたことは、その後の分科会活動を円滑に進める上で大いに貢献したと思う。靖国神社に関する一般人を対象とした調査では、靖国問題が非常にセンシティブであったがために、特に靖国問題に関して興味があったアメリカ側参加者も緊張気味だった。しかし、やはり様々なバックグラウンドを持った人々の意見を、その人のIDと結び付けて考えることは、とても興味深いものだった。こうして他者の意見を分科会メンバーで共に分析することにより、私達自身の分科会における判断をより客観的なものにできたと思う。

3.2 本会議中の議論内容

各自の興味関心に基づいたID問題について、事前にリサーチしペーパーにまとめたものを一人ずつ発表し、議論を行った。以下その内容をいくつか紹介したい。

【集団的IDの形成のされ方—ナショナルID—】

本会議が始まる前に書いた私のペーパーを基に、日本人のナショナルIDの起源に関するプレゼンと、それについてのディスカッションを行った。

今や所与のものとして受け入れられている、日本人が「日本人」であるという事実は、実は近代の発明品であり、黒船の来航など西洋からのプレッシャーに対応する形で新しく生み出されたものであるという趣旨のプレゼンをした。それに対する反応は、ジャパデリ、アメデリを問わず、日本人の「日本人ID」が意外と新しいことに驚いた様子だった。また、このプレゼンから発展して、9.11のテロ攻撃を受けたアメリカがその後愛国心をより一層強め、一致団結した事例などを話し合った。こうしたディスカッションから、私たちはナショナルIDのような集団的IDは、外敵の存在、外からの脅威によって形成さ

れる傾向にあるという結論を得た。(上田 来)

【日本に住むマイノリティとしてのムスリム—宗教ID—】

マイノリティグループの1つとして、「日本に住むムスリムと米国に住むムスリムの、経験または感じる困難の違い」についてディスカッションをした。ここで驚きだったのは、事前インタビューのデータで、日本に住むムスリムは、米国に住むムスリムに比べ、殆ど差別を受けていないということだった。しかしこれは、マイノリティグループとしてのムスリムが日本で完全に満足しているということではない。ムスリムは、差別はされないが、「いないもの」として扱われている」と感じているとのことである。これは、米国における差別と質こそ違えど、同程度に深刻な問題であると感じた。このセッションにより私達は、日本ではマイノリティグループを「ウチ」へ受け入れる教育を施す必要性があると感じるなど、文化によって生じるマイノリティ問題とそれに対して施すべき対策が違うことを認識した。

(櫻 静香)

【戦争の歴史が作り出すIDとは？】

—被爆地・広島から考える—

「原爆ドームを見た瞬間、これほどまで自分のIDを強く感じたことはなかった。」とショックを露わにしながら感情的に話すアメリカ側参加者。なぜ自分の家族が原爆を投下した訳でもないのにこのような気持ちになるのか、日本人はアメリカ人に対して怒りを感じるのか、戦争がもたらす国家・民族IDとは何か。広島平和資料記念館を背に議論は続いた。「何人であるかは関係ない。原爆の悲劇を知り、私たちは人類として共通に平和を願うのだ。」

私たちは約60年前戦火を交えていた国の学生である。(三窪英里)

【普遍的ID地球市民の視点から考える—】

「地球市民」というIDは、いかにして形成されるのだろうか。強固なIDとは外からの脅威によって形作られるものであるため、私達は地球温暖化やエネルギー問題、食糧問題など、人類共通の脅威の存在が、「地球市民」という意識の形成に寄与するのではないかと考えた。しかしこの種の脅威は、戦争などとは違いその姿が見えにくく、また外敵が自分達

第4章 分科会活動

人類であるというジレンマを抱えているという問題点があることは否めない。(廣田隆介)

3.3 ファイナルプロジェクト

1ヵ月の議論の成果となるファイナルプロジェクトでは、IDの形成とそれによって誘引される葛藤や衝突を最も顕著に表す例として、戦争がもたらすIDに焦点を絞り、靖国神社と広島を軸に作成した。専門家や被爆者の話、フォーラムや分科会の議論など、会議中の全ての経験から命題に対する答えを模索した。

IDの衝突はしばしば避けられず、過去の過ちに対する許しは特別困難である。しかし、他人の立場になって、自らの役割、相手の気持ち、そして自分がどういう人間であるかということを考えることが紛争解決の第1歩になるであろう。そのプロセスは非常に複雑で険しい。しかし、私たちは決して希望を捨てず挑戦し続けたい。

4. 参加者の声

【アイデンティティーの社会学分科会

～本会議中の空気～】

国家間関係、マイノリティ問題、ジェンダー、社会階層、対人関係、そして一個人と、とても広いトピックを扱う分科会であったことにより、様々な関心領域、及び問題意識を持った学生が集まったということが、本分科会の最大の特徴であった。ゆえに本会議開始直後は、ファイナルプロジェクトへ向けての方向性の違いが顕著に現れ、衝突を繰り返した。不慣れな環境と24時間共同生活から来るストレス、さらには「自分の思いが上手く伝えられない」、「他人の話を素直に受け入れられない」、などの葛藤から、10日目前後までは、気分が落ち込んだままのメンバーや、感情を抑え切れない余りに突然議論の場を立ち去ってしまうメンバーも見られた。皮肉なことに、私達が問題意識を持っていた「IDの衝突」を、いつの間にか私達自身で体現していたのであった。

しかし、転機は突然訪れた。ファイナルプロジェクトの準備と自由討論の時間を明確に分けたことにより、メンバーは常に具体的な成果を出さなければならないというプレッシャーから解放され、その率直な胸の内をポツリ、ポツリと語り始めた。自身の

被差別、差別体験から、個人の信仰のようなナイーブな議題、さらには靖国神社、広島、アメリカの格差社会などについて、白熱した議論が展開された。その過程においては、自らのIDの根幹を再確認せざるをえない場面も多く、さらに再構築を迫られるような新たな発見も多くあった。そして本会議が終わる頃には、全てを曝け出し、晴れ晴れとした皆の表情が、分科会における議論の充実度を物語っていた。一方でファイナルプロジェクトは、充実した議論とは裏腹に、不完全燃焼となってしまった感は否めない。しかしこの分科会で得た経験、すなわち「国籍や言語の壁を乗り越えて、互いを友人として理解し合った」という成功体験は、必ずや私達の未来を通じて、新たな「IDの衝突」を回避するための礎となるだろう。

(廣田隆介)

5. 分科会総括

国家、性、民族、宗教、経済的格差広いトピックについて話し合われた当分科会であるが、問題によっては社会構造や文化の違いから日米間で非常に大きな意識の差が感じられた。しかし、たとえ狭い、専門的なトピックから入った際でも話題はたちまち広がり、日本人、アメリカ人であることを超越して、個人としての意見が活発に交わされたことは意義深い。

一方で、共通の目標を設定しアウトプットを出すための協働作業に関しては、意見の対立や価値観の違いからくる困難も多々あった。しかしその過程もまた個々のIDの相克であり、JASCそれ自体が異なる他者、そして自分と対峙することで相互理解を目指すためのチャンレジの場であったと考えている。他の立場に立って、自らのIDと照らし合わせ、分かり合おうと努力する。このプロセスを通して毎回のセッションで得られた新たな気づきこそが、当分科会で得られた最大の成果であったのかもしれない。常に真摯な態度で自分の気持ちに向き合い、正直に自己を表現してくれたメンバーと全員で分科会を作り上げられたことを心から嬉しく思う。

(分科会コーディネーター 三窪英里)

文化：グローバル化の渦中で

Eastern and Western Popular Art: Who is Imitating Whom?

分科会メンバー

高井竜輔*

呉 宣咏

篠原由香里

堀 沙織

間嶋絵梨

Casey Samulski*

Alison Miller

Aya Nakanishi

Brad Bower

Marquita Taylor

(*印はコーディネーターを示す)



分科会概要

今日、文化は簡単に国境を越える。日本の若者はヒップホップに夢中になり、村上春樹は全米でベストセラーとなった。進展するグローバル化に伴う文化の伝播や普及は国家の枠組みを超えた交流を加速させると評価される一方で、地域の伝統や特性を破壊するという批判にも晒されている。当分科会では、文学、映像作品、音楽とジャンルを問わず広く表象芸術全般を扱いながら日本およびアメリカ文化の共通点や相違点と、その背後に潜む広範な社会システムへの理解を深めることを主眼とする。日米の文化は互いにかなる影響を与えあってきたか。友好と相互理解の実現に向け文化の果たす役割とは。行動する主体としての学生の視点を忘れずに議論していきたい。

事前活動

・春合宿 5月3日(木)～5月5日(土)

日本側参加者同士の初めての顔合わせとなる春合宿では、分科会メンバーについてユニークなあだ名を決めた後、各自の分科会に対するビジョンを交換・共有した。グローバル化する現代と文化のアイデンティティ、国際的な相互理解の進展と文化のあ

り方等、各メンバーの興味や関心を基に、共通のテーマや方向性を検討する作業を行った。

・防衛大訪問 6月22日(金)

防衛大学校を訪問し、映画や文学に表象される日米の戦争観・死生観に関する文化的相違や共通点についてディスカッションを行った。『硫黄島の砂』や『父親たちの星条旗』といった映画や第二次対戦を扱った評論を手がかりに、個人主義と集団主義、戦争の描かれ方の変遷と日米の歴史観など、広範な分野に渡って貴重な意見交換が出来た。



第4章 分科会活動

・国際交流基金訪問 6月27日(水)

独立行政法人国際交流基金を訪問し、「文化を通じた国際的な相互理解」について伺った。ロサンゼルス事務所長の井上氏より、芸術文化交流・日本語教育の普及・日本研究支援を通じた総合的な日本理解の促進という国際交流基金の取り組みについてお話を伺った後、所長の小川忠氏のレクチャーを受けた。小川氏は「誇りの不平等」や「近代の超克」と言った言葉をキーワードに、グローバル化する現代における、文化と人々のアイデンティティの保存と衝突について話された。単なる紹介にとどまらない人間同士の交わりがあって初めて文化の交流が成り立つ(=双方向性の重要性)、あるいは、相互理解は到達点ではなく目指す過程である(=理解したと思った瞬間誤解が始まっている)といった鋭い指摘は、今後の分科会運営に意義深い示唆を与えた。

・分科会合宿 7月6日(金)~7月7日(土)

週一回ペースでオンラインミーティングは行っていたものの、メンバー全員が揃ってミーティングを行う機会が無かったため、本会議を前にもう一度分科会の目指す方向性を明確化することを目標に、国立青少年記念オリンピックセンターにおいて合宿形式のミーティングを行った。メンバーは事前に各自が本会議で扱いたい分野を整理し直して議論に臨み、1泊2日の熱いディスカッションを経て、「グローバル化する現代社会においては、文化と人々のアイデンティティが密接に結びついていること」「異なる文化同士の相互的な理解と共生に向けた文化的共同(=collaboration)の重要性」が日本側メンバーの共通の問題意識として得られた。

本会議活動

・東京サイト (RT#1-3)

日米参加者同士初めての顔合わせとなった東京サイトでは自らのバックグラウンドや将来の夢、RTペーパーに基づくトピックの共有によってRTディスカッションの基盤作りを行った。RTのテーマである「文化」に対し、日本側は“culture”の意味で捉える一方、アメリカ側は“Art”を扱うと理解していたことによるギャップは、「国境を越えて広がり影響を与え合い、主にインターネットを通じて

個人の意思決定に作用するPop culture」という共通のフォーカスを見つけることで解消された。インターネットと民主制を背景とするPop cultureを通じた個人のempowermentという、ファイナルフォーラムに直結する重要なアイデアが提出される一方で、ディスカッションスタイルの違いから、日米間の参加者の間で上手く意思疎通が出来ない場面もあった。

・分科会フィールドトリップ

7月30日の分科会フィールドトリップは、呉宣咏のコーディネートで早稲田大学の関根勝教授よりレクチャーを頂いた。演劇をご専門にされる先生から、日本の伝統的な演劇である能に関するお話を頂けたことは、アメリカ側参加者だけでなく日本側参加者にとっても、自国と文化のあり方を再考する機会となった。



早稲田大学にて。フィールドトリップの帰りに。

・秋田サイト (RT#4-8)

秋田サイトでは二つの重要な進展があった。まず、「発言は挙手を経て司会に指名された後」など、ディスカッションで遵守する日米共通のグラウンドルールを作成した。これにより全員を巻き込んだ議論が円滑に進行するようになった。もうひとつの進展はファイナルフォーラムでビデオを使ったプレゼンテーションを実施すると決定したことである。分科会ではこれまで、最終的な到達点であるファイナルプロジェクトをめぐる、アカデミズムを追求する

か、エンターテインメント性を志向するかという形式レベルでの対立があり、何を追求すべきかというコンテンツレベルでの話し合いが殆ど出来ていない状況にあった。そこで、分科会活動も折り返し地点となる秋田サイトにおいて、全体の方向性を全員の意見を勘案した上で決定し、ファイナルフォーラムに向けてすべきことを明確化する方針をとった。投票の結果、ビデオを作成することで一致した。映像を用いながらもナレーションや字幕による十分な説明を行うことでアカデミズムを損なうこともないという結論からだった。

・広島サイト (RT#9-10)

ファイナルフォーラムに向け、ビデオを作成するという秋田サイトでの決定と、今までのディスカッションを基に、分科会全体の問題意識を反映した個別のテーマを設定し、それぞれについて2～3人のグループワークで探究することになった。具体的なテーマ設定としては後述のように、「ポップカルチャーの定義」「相互に影響を与え合う文化」「国境を越えるポップカルチャーは新しい帝国主義か(=文化とアイデンティティ)」等が挙がった。過密日程と熱さに悩まされながらも、広島サイトでは各グループの進展状況をシェアし、分科会全体の方向性を鑑みつつ各セクションの内容を改良していく作業が行われた。

・京都サイト (RT#11-12)

ファイナルフォーラムに向け、ビデオを完成させる最終的な仕上げの段階となった。各グループは夜遅くまで自分たちの主張を的確に表現できるイメージの収集や字幕となる解説文の推敲に頭を悩ませた。メンバー同士がそれぞれの得意分野を持ち寄って助け合ったり、アメリカ側と日本側メンバーが時に談笑しつつも集中して共同作業に取り組む様子は、分科会全体がチームとしてまとまり、機能していることを雄弁に物語っていたと思う。慣れない英語でのナレーションの収録や、映像・音声の最終的なチェックを経て分科会のファイナルプロジェクトが完成したのは、フォーラムの日の早朝のことだった。

ファイナルプロジェクト

ファイナルプロジェクトは、分科会の取り組みの成果を踏まえ、以下の内容に照準を当てたビデオを制作した。ビデオは分科会内やフォーラム会場に訪れた以外の人々からも反応を得るため、Youtubeで公開することとなった。

ビデオは

http://jp.youtube.com/watch?v=orx_EAjn5UU のURLから閲覧することが出来る。

ビデオのコンテンツ

- I) Intro (分科会設置の目的)
- II) What is pop culture? (ポップカルチャーの定義)
 - a) Evolution of pop culture (ポップカルチャーの成立)
 - b) Actors (ポップカルチャーは誰とともにあるのか)
- III) Cultural Interactions? (文化の交流?)
 - a) Melting (混交する文化)
 - b) Stereotypes (文化的ステレオタイプ)
 - c) Introducing Cultures (文化を紹介する)
- IV) Colonization? (文化は新しい植民地主義か)
 - a) Cultural Identity (文化とアイデンティティ)
 - b) Economics / Tensions (経済的側面と反発)
- V) Conclusion (結論：文化の担い手として)

第4章 分科会活動

総括

多くのアメリカ人の若者が日本のMangaに夢中になり、ハリウッド映画に代表されるアメリカの生活様式は、今や現代日本人の生活に完全に定着している。世界屈指の経済大国として繁栄する両国は60年前の戦争など無かったことのように友好的だ。歴史も人種も原語も異なる日米両国が高度な水準での「相互理解」を実現できたのならば、紛争の絶えない中東や世界の他の地域にその達成をロールモデルとして提供できないか。それはきっと、70年前に始まった日米学生会議の理念である「太平洋の平和が世界の平和に通ず」につながるものがあるはずだ。

その反面、日米関係の現状を疑うことも忘れてはならない。僕らはどこまで本当にお互いのことを分かっていると言えるだろうか？ 政治的や経済とは異なり、文化やアイデンティティといった視点から、ステレオタイプやイデオロギーの表層を超えた次元での相互理解の獲得を目指すこと。それが分科会を設定した目的だった。日米8人の個性溢れるメンバーと海の向こうの頼れる相棒Caseyとともに駆け抜けたこの半年は忘れられないものになった。みんな本当にありがとう。



京都での分科会の合間に。プレゼンテーションの練習・・・？